

大阪狭山市文化財報告書25

**大阪狭山市内遺跡群  
発掘調査概要報告書12**



平成14年(2002年)3月  
大阪狭山市教育委員会

大阪狭山市文化財報告書25

# **大阪狭山市内遺跡群 発掘調査概要報告書12**



**平成14年(2002年)3月  
大阪狭山市教育委員会**

## 序 文

大阪狭山市内には、大阪府の史跡名勝に指定されております狭山池をはじめとして多くの文化財があります。狭山池ではダム化に伴う発掘調査によって多くの遺跡、遺構が出土し、平成13年の3月にはその成果を中心に展示した大阪府立狭山池博物館がオープンいたしました。

このような調査と併行いたしまして、本市の教育委員会では平成2年度より個人住宅などの建築に伴う発掘調査を継続的に実施してまいりました。本年度は狭山藩陣屋跡、東野廃寺、金蔵寺跡などの遺跡で調査を実施し、貴重な成果を得ることができました。本報告書はこれらの調査成果をまとめたものです。本書が地域の歴史を考える上での一助となれば幸いです。

調査にあたりましては、建築主の皆様ならびに周辺の皆様に多大なご協力を賜り、厚く感謝いたします。

今後とも本市の文化財保護行政に対するご理解とご支援のほどをよろしくお願ひいたします。

平成14年(2002年)3月

大阪狭山市教育委員会

教育長 澤 田 宗 和

## 例　　言

1. 本書は国庫の補助を受け、大阪狭山市教育委員会が平成13年度事業として大阪狭山市内で実施した個人住宅住宅建築等に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査の結果をまとめた概要報告書である。
2. 書に収録した調査は以下の通りである。
  - 1 狹山藩陣屋跡 01-1区、01-4区、
  - 2 茉萸木北遺跡 01-1区
  - 3 東野庵寺 01-1区
  - 4 金藏寺跡 01-1区
  - 5 狹山新宿遺跡 01-1区
3. 現地調査は大阪狭山市教育委員会生涯学習推進課市川秀之が担当し、同課谷義浩がこれを助けた現地調査においては正名直方、鳥山文夫、米澤孝成、古西健治、松波宏ら各氏のご協力を得た。
4. 内業作業については市川秀之が担当し、若宮美佐、橋本和美、笹岡裕里子、永橋千代子、小坪寿美子ら各氏のご協力を得た。遺物の写真撮影の一部は阿南写真工房に依頼した。
5. 本書の執筆・編集は市川秀之が担当した。

## 本文目次

(頁)

序　文	大阪狭山市教育委員会教育長　澤田宗和	
例　言		
はじめに	1	
1. 狹山藩陣屋跡	00-8区・01-1区・01-4区	3
2. 茉萸木北遺跡	01-1区	19
3. 東野庵寺	01-1区	21
4. 金藏寺跡	01-1区	24
5. 狹山新宿遺跡	01-1区	30
まとめ		40

## はじめに

大阪狭山市内では1960年代以降に急激な人口増加が生じ、南部の丘陵地を中心に住宅開発が進んだ。80年代以降はそのころの勢いは衰えたものの、小規模な開発はなお盛んである。また近年では60年代、70年代に新築された住宅の建て替えの時期が到来しており、これらに伴う埋蔵文化財の発掘調査は微増の傾向にある。ことにここ数年は狭山陣屋跡の中心部において歩道の設置事業が進められており、その周辺において住居の移転や建て替えが頻繁に行われており、これにともなう発掘調査が本市における発掘調査の中心になっている。

大阪狭山市内の遺跡分布および地形分類は図1のとおりである。大阪狭山市は西側の泉北丘陵と東側の羽曳野丘陵にはさまれた場所に所在するが、この両丘陵の間にいく筋かの南北方向の谷筋が走っている。これらの谷筋からは旧石器、縄文時代の打製石器がいくつか発見されている。

弥生時代の遺跡としては市域南部の高地において、弥生時代後期の集落が検出された茱萸木遺跡がわずかに知られるのみである。

古墳時代前期の遺跡についてもいまだ明らかでないことが多いが、狭山池北側の池尻遺跡で庄内期の遺構、遺物が確認されており、狭山神社遺跡でも当該期の遺物が出土している。今後沖積面での調査が進めばさらにこの時期の遺跡も増えることが予想されよう。

古墳時代中期に入ると、泉北丘陵を中心にその築造が展開された陶邑窯跡群が東方へとその領域を拡大し、本市西端にあたる陶器山丘陵とその北側に広がる中位段丘の斜面に須恵器窯が多く築かれた。古墳時代後期の6世紀中葉から後葉になると、陶邑窯跡群はさらに東方に広がり、本市域中に広く分布している中位段丘や開析谷の斜面にも窯を築き須恵器生産を行いうようになった。7世紀代に入っても須恵器生産は継続するが、7世紀中葉からは窯の数も減少していく。

わが国最古の溜池といわれる狭山池の築造をめぐる諸問題については、長らく議論があったが、狭山池ダム化工事に伴って狭山池調査事務所が行った一連の発掘調査によって、築造年代は7世紀初頭であることが明らかになった。発掘調査では、狭山池内において中樋遺構、東樋遺構、西樋遺構、木製枠工などさまざまな遺構が次々に検出され、当地域の歴史像は豊かさを増すこととなった。

狭山池が築かれた西除川（旧天野川）に沿った大きな谷の東西に広がる中位段丘面上には、7世紀後半の寺院跡である東野廃寺、中世城館の池尻城跡、中世集落跡の庄司庵遺跡、古代から中世にかけての寺院跡である狭山神社遺跡、近世城館の狭山藩陣屋跡など、古代から近世にかけての諸遺跡が成立している。池尻城跡では1985年に大阪府教育委員会によって大規模な発掘調査が行われ、またそのほかの遺跡でも開発にともなって発掘調査が継続的に実施されている。

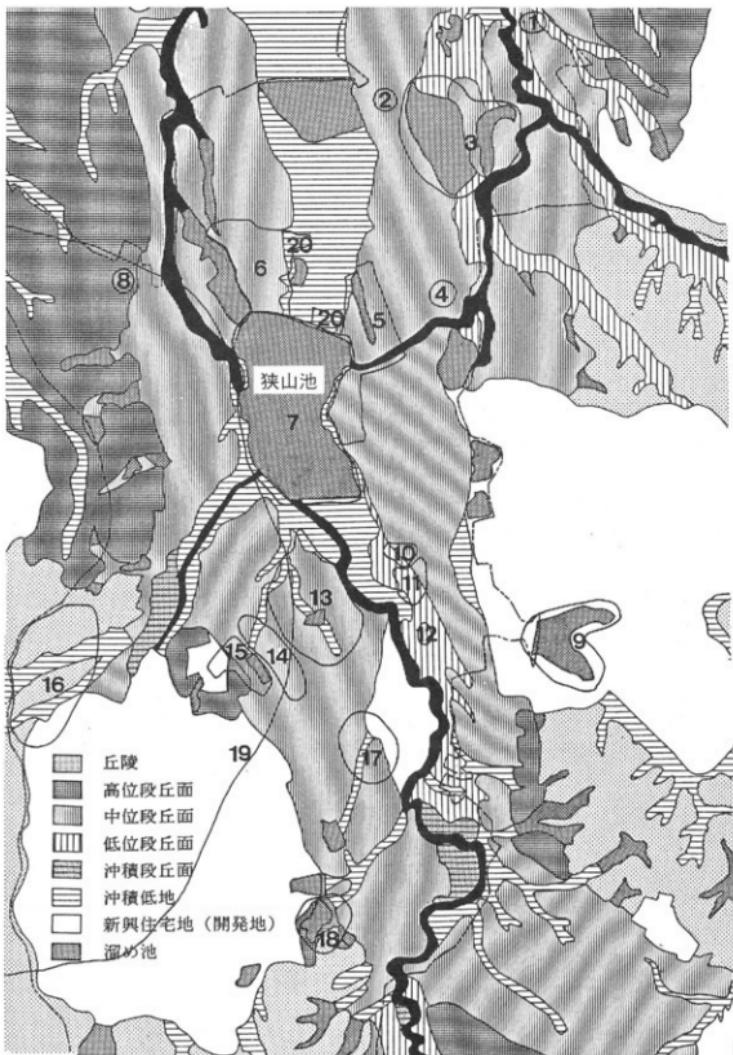


図1 大阪狭山市周辺の地形と遺跡分布図

## 1. 狹山藩陣屋跡

狹山藩陣屋跡は、狹山池東側に広がる中位段丘上に立地する近世の城館跡である。豊臣秀吉によって小田原城を落とされた戦国大名北条氏の末裔が、近世初期にこの地に陣屋を開き、以後明治維新にいたるまでの間、一貫して陣屋が営まれていた。陣屋は北側の上屋敷と南側の下屋敷にわかかれているが、御殿は上屋敷のもっとも北側に設けられ、その周辺には上層の武士の屋敷が建ち、上屋敷の外周部や下屋敷には下層の武士団が居住していた。また下屋敷は狹山池に面した景勝の地であり、藩主の別邸も建てられていた。

狹山藩陣屋跡では1987年以降、大阪府教育委員会や大阪狭山市教育委員会によって発掘調査が行われている。いずれも個人住宅の建築などに伴う小規模な発掘調査ではあるが、その成果を組み合わせることによって陣屋の構造が明らかになりつつある。これまでの調査では陣屋が建築され近世初期を遡る遺物、遺構はほとんど検出されていない。上屋敷についてはほぼ前面にわたって上下2面の遺構面が確認されており、出土遺物からみて上面は天明2年(1782)の大火灾後の遺構面、下面是それ以前の遺構面と考えられる。陣屋内で検出された個々の遺構の性格は多様であるが、遺物を多く含むのは家屋の周辺と思われる場所に掘削された土壙が中心である。おそらくは火災などの後でこのような土壙に廃品が投棄されたのであろう。遺物は日常的な生活用品を中心であるが、硯、水滴などの文房具の出土が比較的多いのは武士の生活の一端を示すものであろう。産地は肥前や堺など国内のものが中心であるがまれに外国産のものがみられる。また下屋敷では発掘調査の数こ



図2 狹山藩陣屋跡調査区位置図 (S=1/5000)

そ少ないものの、やはり家臣の屋敷地などが発掘されている。平成13年秋にはこれらの陣屋の発掘成果を中心に、大阪狭山市立郷土資料館において特別展「狭山と畿内の陣屋を掘る」が開催されている。

なお大阪狭山市教育委員会では本書に報告したもののほかに狭山藩陣屋跡で3箇所の調査を行っている。これらは公共工事や開発工事に伴う調査であるので別に報告書を刊行しそこに報告している。

#### (00-8区)

狭山4丁目2492-1に所在する。住宅の建築とともに発掘調査を実施した。予定されている建築物の規模に合わせて東西800cm、南北680cmの調査区を設定し、機械および人力で掘削をおこなった。この地点における遺構面は1面だけで現状地盤から20cmさがった場所で検出した。調査の結果、土壙、石列、おち込み、溝など多くの遺構を検出した。

石列1は調査区の西端から中心部に向かって伸びる東西方向の遺構で調査区内において長さ200cmであった。幅92cm、深さ20cmから15cmの東西方向の溝を掘り、その南側に計15cm程度の自然石を一列一段に並べたものである。石列は溝の肩を保護する目的のものと考えられ、本来は溝の北側にも同様の石列が存在した可能性もある。この溝はまっすぐ東側に伸びて埋甕遺構2にあたって止まるが石列はさらに少しのびて落ち込み遺構に至っている。

埋甕遺構2は直径32cm、器高29cmの陶器甕を穴を掘って埋め込んだものである。甕はほぼ完形の状態で出土した。

落ち込み遺構はこの石列1や埋め甕遺構2の東側に所在する東西225cm、南北187cm、深さ20cmの長方形の遺構である。遺構の一部は搅乱によって破壊されている。この遺構の底部はほぼ平坦に仕上げられ、底面および側面には2cmの厚さで黄茶色の砂をはりつけている。またこの遺構のほぼ中心部には直径25cmの土壙があり、その埋土からは多くの遺物が出土している。この土壙の上部には斜め上の方向に立てられた土管が出土している。またこの遺構の埋土の中には黄茶色砂のブロックが多く含まれていた。これらは側面、底面などにはりつけられた砂と同じものである。これらの状況からこの落ち込み遺構はカマドの下部構造であると考えられる。カマドの本体はこの落ち込み遺構の上に据えつけられたものと考えられる。はりつけられた砂はカマドの熱伝導を防ぐためのもの、また土壙は焼き口のために掘り下げられたもの、土管は煙出しとして用いられたものであろう。

落ち込み遺構の北側約30%ほどは近年のものと思われる搅乱によって削られており、この遺構と他の遺構との関連は不明である。そのさらに東側には石列2が存在する。これは2列の石列によってはさまれた東西方向の溝状遺構で、溝は調査区内において240cm、深さ15cm、幅は35cmであるが、東側の140cm分については幅65cmと太くなっている。この部分については北側の石列はなくなっている。おそらくこの溝は西側の落ち込み遺構にまで伸びていたものと思われる。またこの石列2は先に述べた石列1とほぼ同一線上に

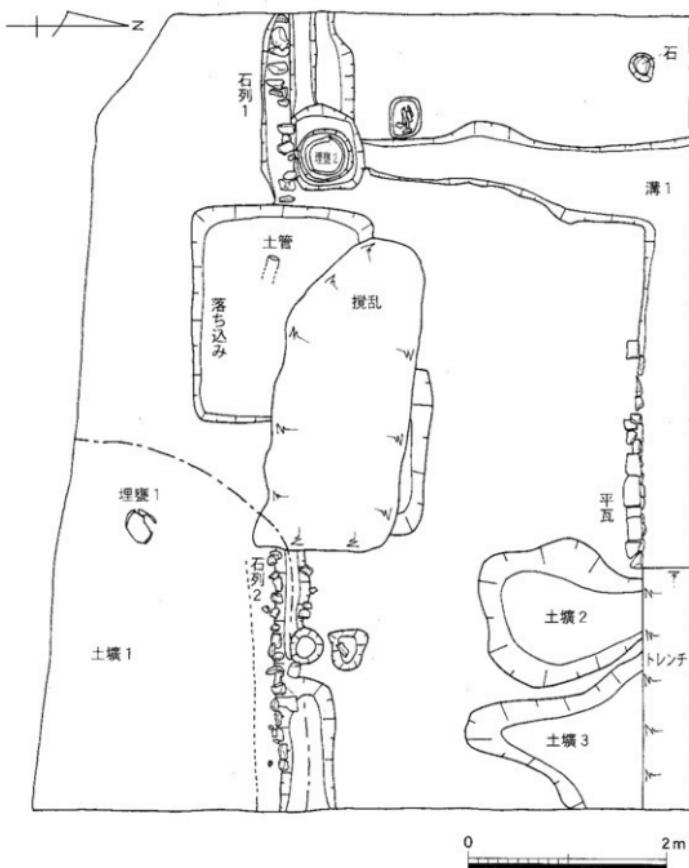


図3 狹山藩陣屋跡00-8区造構平面図 (S=1/50)

並んでいる。

この石列2の南側には、調査区内において南北275cm、東西375cm、深さ85cmの土壌1が存在する。石列2はこの土壌1の埋土の上に存在することから土壌1は石列2に先行する時期の遺構である。

土壌1の遺構埋土からは多くの瓦片などが出土しているので、これは投棄用に掘削された土壌と思われる。この土壌1の埋土の上面、すなわち石列2などと同一平面上に埋甕1が存在した。これは土師質の甕を地面を掘削して埋め込んだものであるが、甕の上部は亡失しており、底部の8cmほどが残存していた。この甕が埋められた遺構面は今回検出した遺構面よりさらに上に存在したものと思われるが、すでに削平を受けたためか、その遺構面を検出することはできなかった。

また先に述べた埋甕遺構2から北側に300cm伸び、そこから90度東側に曲がる溝1が検出されている。屈曲点からはまっすぐ東側に伸び調査区内における長さは600mとなる。この溝の南側肩の一部に長さ237cmにわたって平瓦を一列にならべた箇所があった。溝1の屈曲点から西に165cmの箇所には穴を掘って据え置かれた石がみられた。この石は直径25cmの扁平な石で礎石と思われる。またこの溝の南側で不整形の土壌が二つ東西に並んで検出されている。西側の土壌2は調査区内において東西162cm、南北150cm、深さ35cm、東側の土壌3は同じく調査区内において東西155cm、南北182cm、深さ25cmであった。

これら一連の遺構の性格は必ずしもあきらかではないが、落ち込み遺構をカマド跡と推定し、またそのかたわらにあった埋甕遺構2を水甕と考えると、これはあきらかに武士の屋敷の台所部分であると考えられる。埋甕遺構2につながる溝1や石列1などは台所から屋外に水を排水する機能を持ったものと考えられるだろう。溝1の平瓦が並べられた部分は雨落ちの部分と思われるので溝1の屈曲点から東側は野外の雨落ち溝と思われる。このように考えると溝1よりも南側に建物が設けられていたこととなる。

この調査区で検出された遺構面はこれまで述べてきた1面だけであるが、埋甕遺構1の出土状況などをみると明らかにこの面よりも上にも遺構面が存在したものと思われる。狭山藩陣屋跡上屋敷の北部ではこれまで上下2面の遺構面が検出されることが多かったが、本調査区での遺構面はこのうち下の遺構面に対応するものと思われる。また石列2が土壌1が埋められた後に設けられているようにこの遺構面における遺構の間にも時期差を考慮すべきであろう。

00-8区より出土した遺物は図4～6、及び表1に示した通りである。

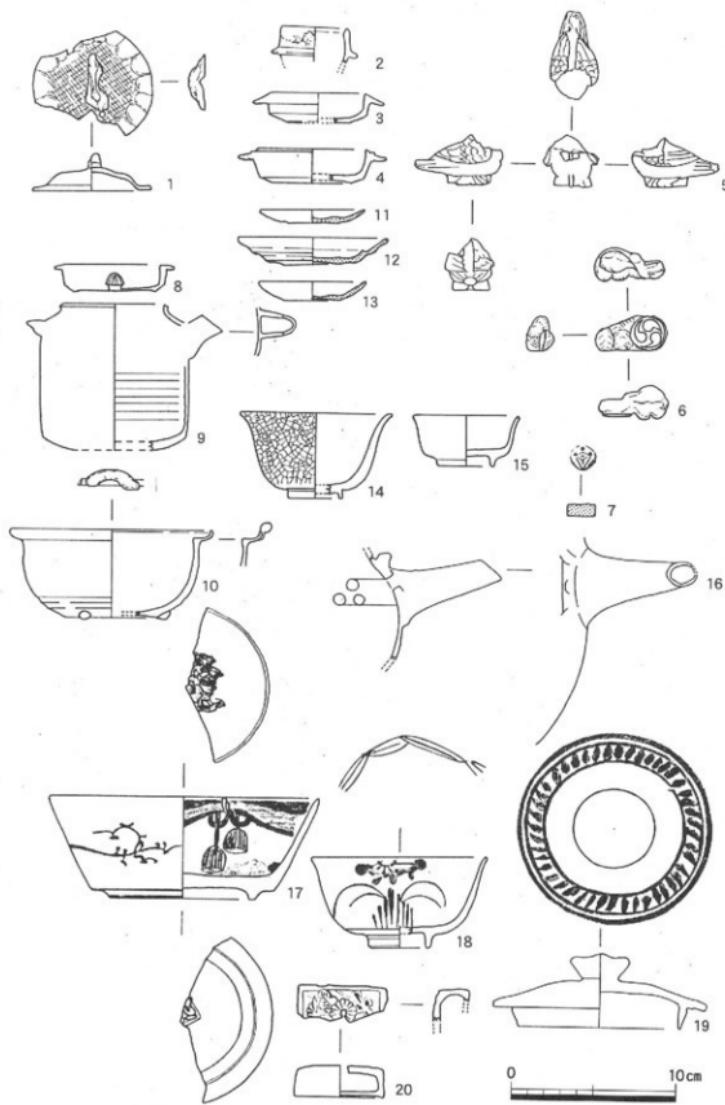


図4 狹山藩陣屋跡00-8区出土遺物(1)

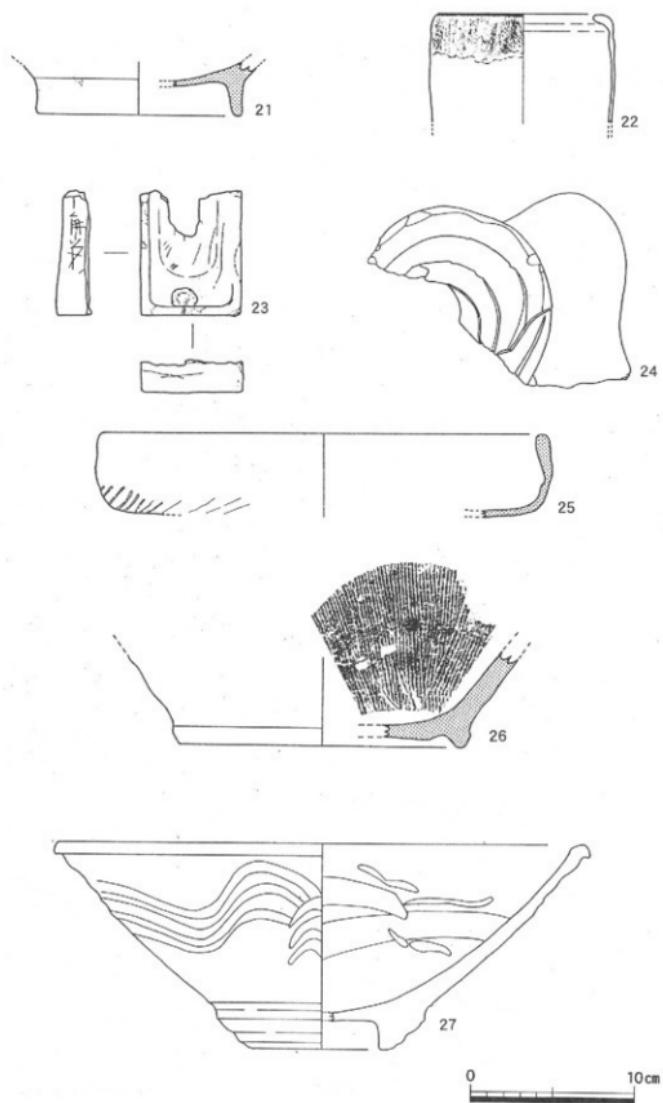
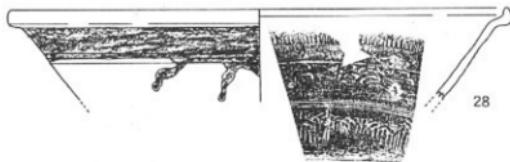
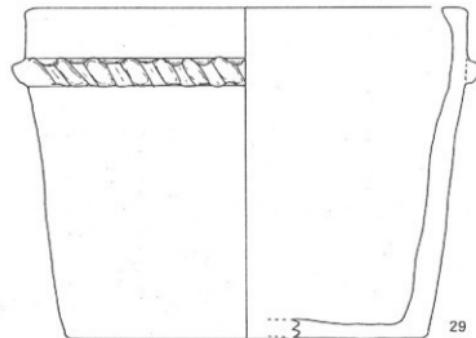


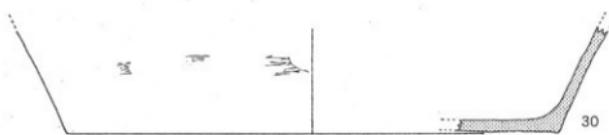
図5 狹山藩陣屋跡00-8区出土遺物(2)



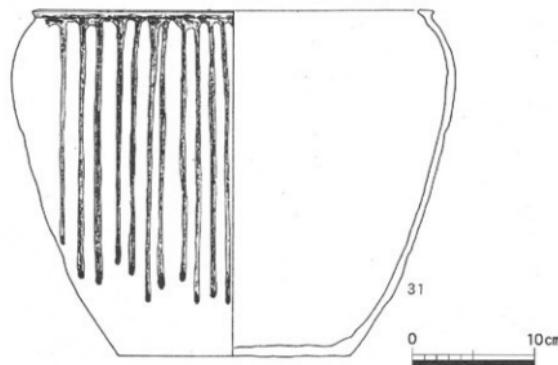
28



29



30



0 10cm

図6 狹山藩陣屋跡00-8区出土遺物(3)

図面番号	遺構	器種	产地	口径	器高	文様	その他
1	遺構面掘中・溝1	陶器・盃(つまみ付き)		7.3cm	2.4cm		
2	遺構面掘削	ミニチュア羽釜		4cm	2.1cm	(緑釉)草花	
3	遺構面掘削中	陶器・中水注蓋	瀬戸美濃系	5.6cm	1.8cm	(黄色の透明釉)	受部径8cm
4	遺構面掘削	陶器・中水注蓋	瀬戸美濃系	6.0cm	2.2cm	(鉄釉)	
5	遺構面掘削中(溝2付近)	上製品・鳩笛	不明		3.3cm	左右型合わせ	幅5.4cm
6	遺構面掘削中(溝2付近)	土人形	不明		2.2cm	円盤状に右三つ巴	幅4.4cm
7		瓦面子			0.7cm		幅1.7cm
8	遺構面掘削中(溝2付近)	陶器・中水注蓋	瀬戸美濃系	7.4cm	1.6cm	(茶褐色釉)	
9	遺構面掘削中(溝2付近)	陶器・中水注	瀬戸美濃系	6.2cm	9.2cm	(茶褐色釉)	
10	遺構面掘削中(溝2付近)	陶器・小瓶	瀬戸美濃系	10.8cm			
11	溝2中	土器・灯明皿		6.4cm	0.8cm	(透明釉)	
12	溝2中	土器・灯明受皿		9.2cm	1.7cm	(透明釉)	
13	溝2中	土器・灯明皿		6.6cm	1.2cm	(透明釉)	
14	溝2中	陶器・中碗	瀬戸美濃系	9.2cm	5.4cm	水割文(透明釉)	高台径3.2cm
15	落ち込み内の土管	磁器・小椀	備前系	6.6cm	6.4cm	(透明青色釉)	高台径3.6cm
16	落ち込み内	陶器・急須			6.7cm	(透明釉)	
17	土杭3の中	磁器・中鉢	備前系	16.6cm	6.4cm	染付(外面)唐草繁ぎ・高台裏二重角に	高台径9cm
						満福(内部)?・見込み花(透明釉)	
18		磁器・中碗	備前系	10.8cm	5.7cm	染付草花(透明釉)	高台径3.4cm
19	遺構内より上(断面中)	陶器・蓋	京焼系	10cm	9.7cm	三重円に筆模様	受部径13.2cm つまみ径3.6cm
20	埋甕1	磁器・水滴	備前系		2cm	染付花(透明釉)	幅7.4cm
21		土器・不明(脚付き)	丹波		4.5cm		底径16.6cm
22	落ち込み内	陶器・香炉	瀬戸美濃系	10cm	6.9cm	青・緑・無色釉	
23		硯				側面に字模様	幅6.1cm 長さ7.9cm 厚さ2.1cm
24		隅瓦			15cm		幅22.8cm
25	溝2中	土器・培壠		27cm	5.2cm		
26	埋め甕2	せつ器・埴り鉢	堺		6cm		底径17.6cm
27	落ち込み内の土管	陶器・大鉢	唐津	33cm	12.8cm	刷毛の波模様	高台径9cm
28	土杭3中	陶器・鉢	唐津	41cm	7.6cm	(白色釉)	
29	土杭1中	瓦質・甕		32cm	27.5cm		底径28.4cm
30	埋甕1	土器・甕		40.4cm	8.5cm		
31	埋甕2	陶器・甕	丹波	47cm	30.2cm	(灰釉)	

表1 狹山藩陣屋跡00-8区出土遺物観察表

(01-1区)

狭山2丁目2395-1外に所在する。住宅の建築に伴って基礎の影響を受ける部分について平面的な調査を実施した。現状地盤から10cm～25cm掘削した高さにおいて地山面である黄茶色シルトからなる面を検出した。この面において遺構の検出に努めたが明瞭な遺構を検出することができなかった。ただ調査区の北側のトレーナーにおいて金属分を含む黒灰色土を埋土とする土壤状の掘り込みをいくつか検出しているが、いずれも比較的近年のものと思われる。また調査区の西端において北側にトレーナーを掘削し遺構の所在を確認したところ、深さ2m以上にわたって地山が北側に下がっていくことが確認できた。これはその位置から考えて狭山藩陣屋上屋敷の西側を画していた濠であるお庭池の南岸の一部であると考えられる。お庭池は近代以降少しづつ埋め立てられ現在は北側でわずかに残っているに過ぎないが、01-1区のトレーナーで確認されたものもこのようない埋め立ての跡と思われる。岸には護岸を示す石垣、杭列などは検出できなかった。本調査区において出土した遺物は図8および表2に掲載した通りである。これらはいづれも包含層掘削中に出土したものであり、遺構に伴う遺物を検出することはできなかった。遺物のなかには明かに近世のものを含んでおり、明瞭な遺構が検出できなかった今回の調査地周辺にも陣屋に伴う遺構がかつて存在したことがうかがえるだろう。

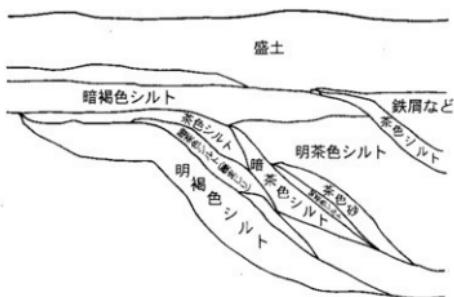


図7 狹山藩陣屋跡01-1区遺構断面図(西側) (S=1/80)

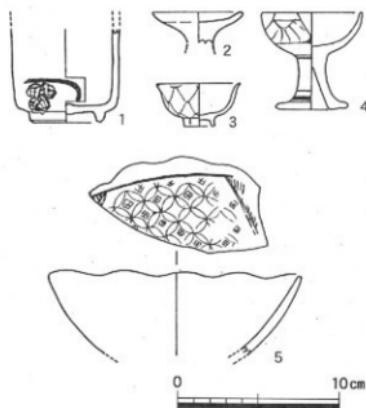


図8 狹山藩陣屋跡01-1区出土遺物

図面番号	地区	器種	产地	口径	器高	文様	その他
1	⑤トレンチ清掃中	磁器・小碗(半筒形)	肥前系		5.9cm	(染付) 透明釉	高台径 4.2cm
2	①トレンチ落ち込み	土器・ミニチュア		5.4cm	2cm	透明釉	
3	④トレンチ方形土壺	磁器・薄手酒杯(壺反形)	肥前系	5.2cm	2.7cm	一重網目文(染付) 透明釉	高台径 4.2cm
4	④トレンチ清掃中	磁器・仏飯器	肥前系	6.2cm	6.2cm	菊花散し(朱色絵付) 透	高台径 4.4cm
5	①トレンチ清掃中	磁器・五寸皿(折縁形)	肥前系	15.6cm	5.1cm	(赤・青・黒絵付) 透明釉	

表2 狹山藩陣屋跡01-1区出土遺物

(01-4区)

狹山3丁目2395-1外に所在する。この場所は明治維新まで北条氏の藩主が居住していた御殿の一部にあたる。住宅の建築に伴って発掘調査を実施した。予定されている建物の規模にあわせて東西840cm、南北780cmの調査区を設定し、掘削をおこなったところ現状地盤より25cm下がった場所で第1遺構面を検出した。この面を精査し、遺構の検出につとめたところ、建物跡、土壙、溝などを検出した。建物跡は等間隔に並んだ柱穴群であり、調査区内において南北380cm、東西340cmの規模をもつ。南北方向には5基の柱穴があり、穴の中心間の間隔は平均95cmである。東西には4基の柱穴が並び、穴の中心の間隔は平均113cmである。この柱穴はいずれも深さが5~10cm程度の浅いものであり、元来はこの箇所に礎石が据え置かれていたものと思われる。この建物の場所は周囲の土よりも明らかに砂、礫が多く含まれており、水はけを良くするためなどの目的で土を入れ替えている可能性が高い。

調査区の北端には東西方向の溝がみられた。調査区内での長さ600cm、幅60cmである。溝1の北側の肩が調査区外でありその様相を窺うことができないが、南肩にはところどころに拳大の石が並べられている。

建物跡の西側に建物にほぼ平行するような南北方向の溝2がみられた。この溝は調査調査区内において長さ445cm、幅50cm、深さ15cmで、溝を掘削したのち、黄灰色の粘土をその中に入れて堅く締めるように埋めている。建物の雨落ちにあたる部分にこのような造作を施して雨による浸食を防いだものと思われる。

建物の周囲には4基の土壙がみられた。土壙1は直径40cmの円形で深さは12cm。そのすぐ西に並ぶ土壙2は東西92cm、南北72cmの長方形で深さは17cm。土壙3は直径110cmの円形で深さは38cm。土壙4は南北140cm、東西130cmの不整形の土壙で深さは30cmであった。土壙3、4からは多くの遺物が出土している。近隣の住民の方の記憶によると戦前には今回建物跡が出土した場所には「弁天さん」の祠がまつられていたという。これが、近世から御殿の守護神として祭祀されていたのか、あるいは明治以降にまつられたものなのかは不明であるが、土壙3、4などの遺物は近世のものが中心であるので、この祠の建っていた面は近世後期のものと同一の面であることは確かである。

第1面の調査終了後、さらに掘削を進め、第2遺構面の検出を開始した。第1遺構面より20cm下がった位置で茶色シルトを主体とする第2遺構面を検出した。第2遺構面においては土壙を中心とする多くの遺構を検出することができた。

土壙5は調査区内において南北288cm、東西300cmの方形の土壙である。底面は2段の平坦な部分をもち、上は深さ65cm、下は80cmである。土壙6も方形の土壙で調査区内において南北360cm、東西288cm、深さ28cmである。土壙6は全体全体が炭の小片などを多く含む暗灰色土に埋められている。また溝3は土壙6の底面を一部掘り込んで掘削されたもので長さ260cm、幅80cm、深さ30cmである。底面は北側に傾斜する。この溝も土壙6と同様暗灰色土で埋められているので土壙6と一緒に機能し、廃棄されたものと思われる。また北側の土壙5は溝3の埋土を掘削して作られているので、溝3は土壙5に先行するこ

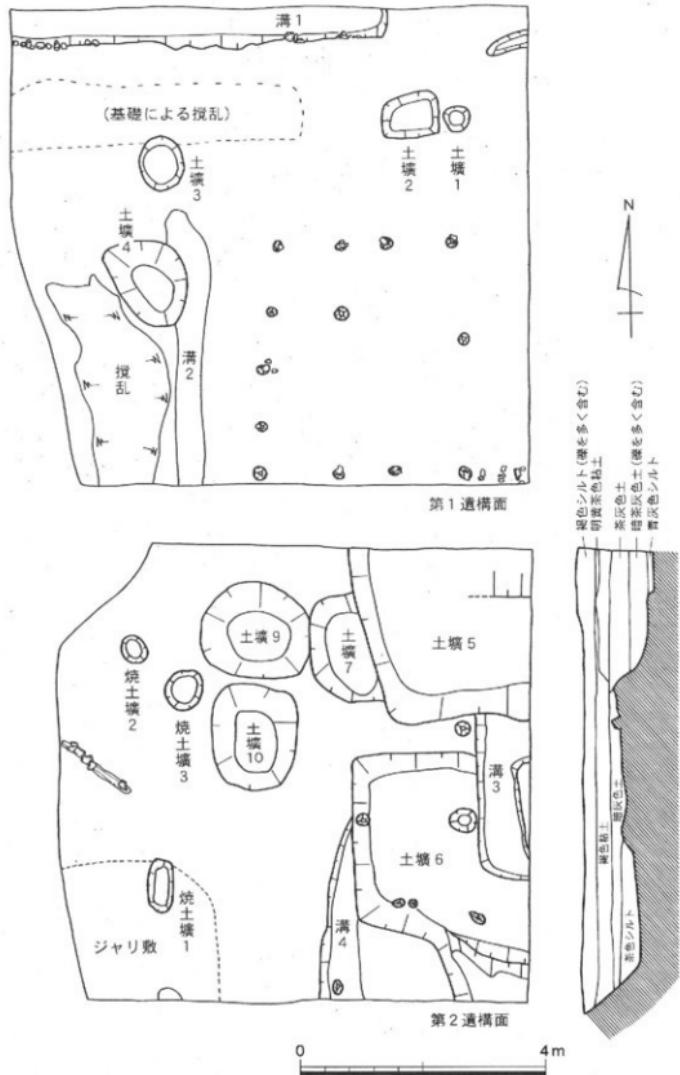


図9 狹山藩陣屋跡01-4区遺構平面面図 (S=1/80)

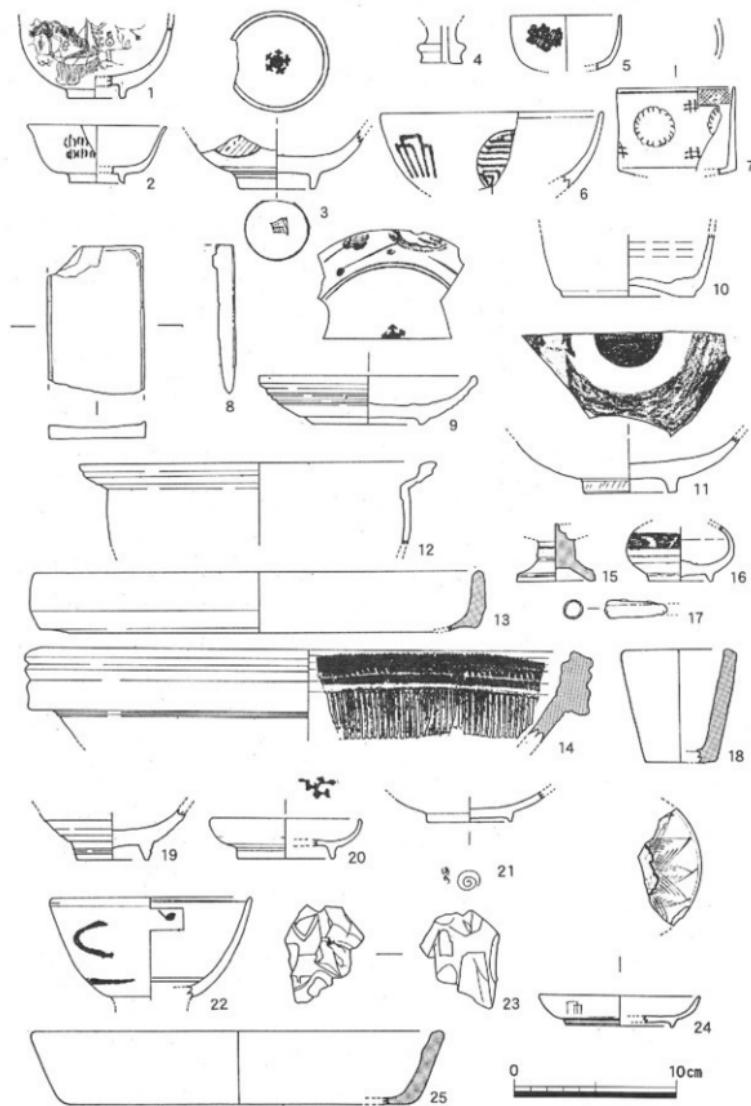


図 10 狹山藩陣屋跡 01-4 区出土遺物(1)

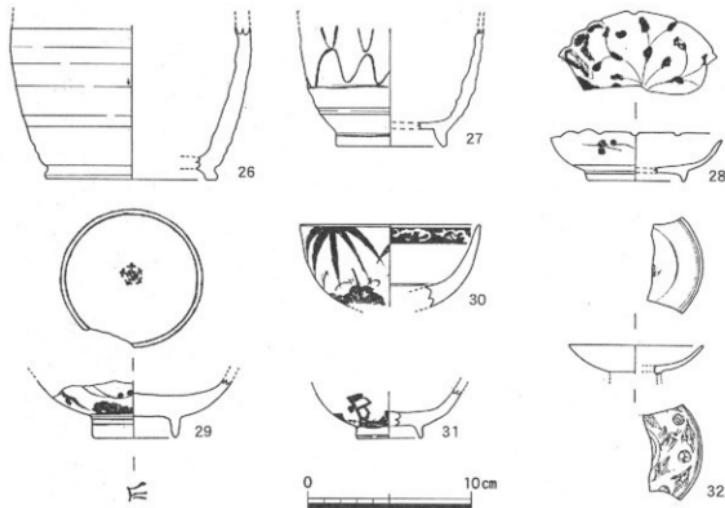


図 11 狹山灌陣屋跡 01-4 区(2)

となる。溝は土壙 6 の南に連続する溝で調査区内において長さ 2880cm、幅 60cm、深さ 25cm である。底面は南に向かって傾斜する。

土壙 7 は土壙 5 の西側に所在し、南北 180cm、東西 100cm、深さ 30cm である。ただし東側の肩は土壙 5 によって削られているので、やはりこの土壙 7 も土壙 5 に先行することとなる。土壙 9 は南北 160cm、東西 180cm で、深さ 38cm。それに南接する土壙 10 は南北 172cm、東西 140cm、深さ 42cm である。

また調査区の西側半分で 3 基の焼土壙を検出した。これは他の土壙とは異なり側面および底面が赤変しており、また埋土も炭片などを多く含んだ黒灰色土が中心となっている。焼土壙 1 は南北 100cm、東西 68cm の長円形で、深さは 20cm。表面から 3~4cm が赤変していた。焼土壙 2 は直径 40cm の円形で深さは 12cm。また焼土壙 3 は直径 60cm の円形で深さは 15cm であった。焼土壙 1 の底面が平坦であるのに対して、焼土壙 2、3 はすり鉢状である。

また焼土壙 1 の位置より南西部、調査区内において南北 220cm、東西 240cm の範囲については遺構面上に砂利を敷いた痕跡がみられた。砂利は遺構面のシルトの中に食い込んでおり、おそらくは敷いた後、踏み固めなどの方法で締めたものと思われる。

第 2 遺構面の一連の遺構のうち、注目されるのは 3 基の焼土壙であろう。土壙 1 の埋土

図面 番号	遺構	器種	産地	器高	文様	その他
1	掘削中 (1面より上)	磁器・小碗	肥前系	4.4	透明釉(染付)馬に兵隊	
2	掘削中 (1面より上)	磁器・小碗(端反形)	肥前系	8.6	4.2 透明釉(染付)外・見込み文様	高台径4.6
3	掘削中 (1面より上)	磁器・中碗	肥前系		3.8 透明釉(染付)外・見込み二重円に五弁花・高台裏一重円に名	高台径4.6
4	(2面)土坑5	陶器・蓋			2.3	
5	(2面)土坑5	磁器・小碗	肥前系	6.8	3.5 透明釉(染付)花	
6	(2面)土坑5	磁器・中碗	肥前系	13.6	4.8 透明釉(染付)折松葉帆	
7	(2面)土坑5	磁器・小碗	肥前系	7.2	5.4 透明釉(染付)外面 井・花内面 四方舞文様 見込み二重円	
8	(2面)土坑5	碗				長さ9.3 幅6 厚さ1
9	(2面)土坑5	磁器・小皿(平形)	肥前系	13.6	3 透明釉(染付)崩し唐草 見込み五弁花	
10	(2面)土坑5	陶器・中瓶底	瀬戸美濃系		褐色釉	底部8.2
11	(2面)土坑5	陶器・中鉢			3.9 透明釉(茶・青・緑染付)	
12	(2面)土坑5	土器・小甕		22	3.4	
13	(2面)土坑5	土器・焰烙		27.6	10.4	
14	(2面)土坑5	せつ器・すり鉢	堺	33	5.8	
15	(2面)土坑6	陶器・仏飯器脚部	京焼系		3.6 青色釉・白色釉	
16	(2面)土坑6	陶器・瓶類(髪油壺?)			3.4 茶褐色釉	高台径4
17	(2面)土坑6	金属製品・煙管吹口				長さ3.8 吹口径1.1
18	(2面)土坑6	土器・燒塗壺		7.2	7	底径4.4
19	(2面)土坑6	陶器・中碗			3 濃茶釉	高台径4.4
20	(2面)土坑6	磁器・中碗	肥前系	9.4	2.5 透明釉(青色染付)	高台径6
21	(2面)土坑6	陶器・中碗	瀬戸美濃系		1.9 灰色釉 高台裏名	高台径5
22	(2面)土坑6	磁器・中碗	肥前系	12.4	6.4 透明釉(染付)	
23	(2面)土坑6	土人形			6.2 着物・手	
24	(2面)土坑6	磁器・小皿	肥前系	10	1.9 透明釉(染付)外 折松葉帆内 交叉線	高台径6.4
25	(2面)土坑6	土器・焰烙		25.5	4.6	底径21.2
26	(2面)土坑6	陶器・中甕			10.2 薄綠釉	高台径10.4
27	(2面)土坑7	磁器・中碗	肥前系		7.5 透明釉(染付)網目	高台径6.6
28	(2面)土坑7	磁器・小皿(丸形・輪花)	肥前系	10.6	3 透明釉(染付)花	高台径6
29	(2面)土坑7	陶器・中碗	瀬戸美濃系		3.6 透明釉 見込み二重円に五弁花 高台裏名	
30	(2面)土坑9	磁器・中碗	肥前系	11	5.2 透明釉(染付)外 笹草 内青 地に白抜き雲	
31	(2面)土坑10	磁器・小碗	肥前系		3 透明釉(染付)	高台径4
32	(2面)土坑10	磁器・小皿	肥前系	8.4	1.8 透明釉(染付)雪雲散し	

表3 狹山藩陣屋跡01-4区出土遺物観察表

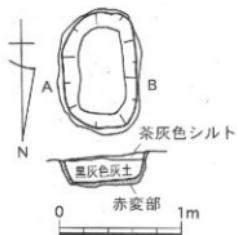


図 12 狹山藩陣屋跡 01-4 区焼土壙 1 遺構平面断面図 (S=1/40)

の内部からは少量ではあるが鉄屑が出土しており、これらの遺構は鋳造に関わるものである可能性が高い。土壤 6 の埋土となっていた暗灰色土のなかにも多くの炭などの小片が含まれており、これもやはり鋳造関連のものとみられる。同様の焼土壙は過去の狭山藩陣屋跡での発掘調査の中でも、00-4区に近接した旧御殿周辺の調査区でいくつか確認されている。00-4区の場所は絵図などから近世後期には御殿であったことは確実であるが、第 2 遺構面の時代（18世紀後半よりも以前）においては鋳造の工房などが設けられていたり、あるいは御殿の内部にそのような施設が設けられていというような可能性が推測できるだろう。さらに周辺での発掘調査を進めるとともに、各地の発掘事例を照合し類例を探す必要があるだろう。

00-4区から出土した遺物のうち実測が可能なものは、図10、11および表3に掲載した通りである。



図 13 茱萸木北遺跡調査区位置図 (S=1/5000)

## 2. 茅薙木北遺跡

茅薙木北遺跡は大阪狭山市南部に所在し、西除川（旧天野川）左岸の段丘面上に立地している。縄文時代の遺物散布地として周知の埋蔵文化財包蔵地に指定されているが、遺跡のほぼ中央を南北に西高野街道が通っており、近世の遺構・遺物の存在も予想される遺跡である。これまで茅薙木北遺跡における発掘調査はほとんど行われていない。

### (01-1区)

本調査区は大阪狭山市茅薙木5丁目736に所在する。住宅の建築に先だって発掘調査を実施した。調査地のすぐ東側には南北に西高野街道が通っており、また西側には正法寺という寺院や茅薙木地区の墓地が立地している。予定される建物の規模や位置、基礎の深さなどを考慮し、敷地の西側に南北600cm、東西740cmの調査区を設定し発掘調査をおこなった。調査区の北端でトレントを掘削したところ現状地盤より15~20cm下がった位置で遺構面を検出したのでその高さまで掘削を実施した。この調査区における遺構面はこの1面のみであった。また調査範囲を敷地の西側に設定したため、東側を走る西高野街道との関連を確認するために調査区の東端からさらに東側に伸びる幅80cm、長さ560cmのトレントを設定し、この部分においても平面的な発掘調査を実施した。

遺構としては井戸、溝、土壙などを検出した。溝1、2、3はいずれも南北方向の溝で溝2は調査区中央で北側の端部を持つものの、他の2本は調査区を貫いている。溝の底面はいずれも北側に向かってわずかに傾斜している。このうち溝3には東側に肥厚した部分があり、その土壤状の部分の両端に丸瓦が建てられた状態で埋め込まれていた。これらの溝は水田などに伴う農耕用の水路であり、この瓦による遺構は水田の水口であると思われる。溝3の埋土からは遺物が出土している。井戸1は直径120cm、深さは60cmで、ほぼ垂直に掘られ、部分的には上部がオーバーハングした状態の箇所もみられる。側面に側板などを施さないわゆる素掘りの井戸であるが、底面には円形に加工した板材を敷いている。これは農業用の井戸などによくみられる構造であり、やはり農業用井戸あるいは水ためと考えられる。なお現在ではこの遺構からの湧水はまったくみられなかった。この井戸に連続して南側に伸びる南北方向の溝が溝4である。溝4は長さ275cmで南端が土壤状にふくらんでいる。

調査区から東側に延ばしたトレントの部分では2基の土壙がみられた。土壙1は一部を確認しただけだが円形の平面形をもつ。調査区内では東西160cm、南北50cmのみを掘削している。深さは18cmであった。そのさらに東側の土壙2は直径105cmのややいびつな円形で、深さは90cm。側面および底面には堅く締められた砂が貼り付けられていた。

遺構の全体的な構成からみて調査区西半分に所在する溝、井戸などは農業用のもの、したがって西側は耕地であり、また東側の土壙2などは用途こそよくわからないが屋内に設けられた遺構と考えられる。したがって西高野街道に面した東側の部分に建物が建ち、西側、つまり建物の背後に耕地が存在する景観を想像することができるだろう。遺物からみ

て遺構の年代は近世後期であるとみられる。

01-1区から出た遺物の内実測可能なものは図15、表4に掲載した通りわずか2点にとどまった。

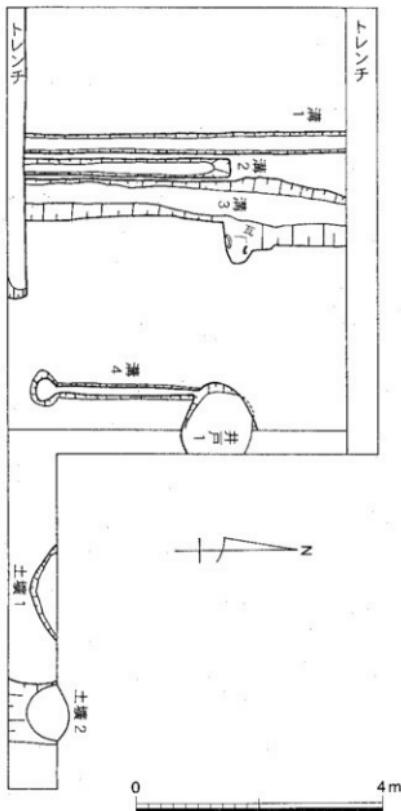


図14 荻窪木北遺跡01-1区遺構平面図 (S=1/80)

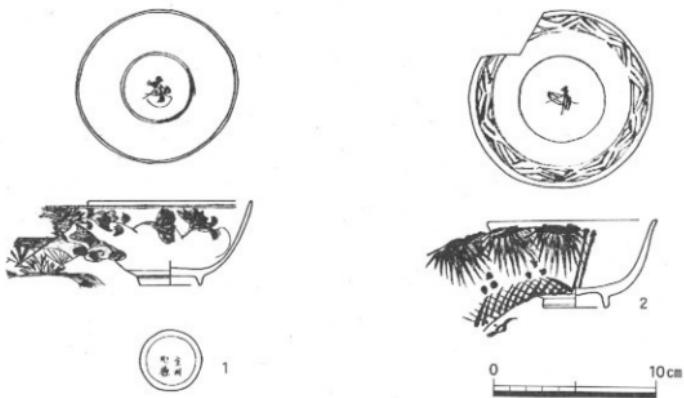


図 15 茅薙木北遺跡 01-1 区出土遺物

固有 器号	器種	産地	口径	器高	文様	その他
1	磁器・中碗	肥前系	10cm	5.2cm	透明釉(青色染付)外 草花・扇子見込み 葉 高台裏鉢	高台径 3.8cm
2	磁器・中碗	肥前系	10.5cm	5.4cm	透明釉(青色染付)外 草 内面・見込み	高台径 4cm

表 4 茅薙木北遺跡 01-1 区出土遺物観察表

### 3. 東野廃寺

東野廃寺は大阪狭山市の北部に所在する遺跡である。西除川右岸の中位段丘上に立地している。東野廃寺とは現在の蓮光寺の場所に建立されていたとみられる古代の寺院である。蓮光寺の境内には塔の心礎が残されており、本格的な発掘調査はこれまで実施されていないものの探集された瓦などから 7 世紀の第 3 四半期に建立されたものと推定されている。また蓮光寺の周辺からは火葬の蔵骨器とみられる奈良時代の須恵器壺なども出土している。さらに蓮光寺のすぐ東側を南北に走る道は平野と高野山をつなぐ中高野街道である。



図 16 東野廃寺調査区位置図 (S=1/5000)

#### (01-1区)

本調査区は東野中2丁目994-2に所在する。住宅の建築に伴って発掘届が提出された。調査地は東野廃寺の中心部と思われる現在の蓮光寺から塩1筆をはさんで北側の敷地であり、東野廃寺と関連する遺物、遺構の存在が予想できたため発掘調査を実施することとなった。

予定されている建物は盛土を施して建てられるため、遺構の所在するレベルを確認する目的で、南北160cm、東西1400cmの調査区を設定し平面的な調査を実施した。その結果東野廃寺に関連する遺物遺構は検出できなかったが、近世の遺物、遺構を確認することができた。

現状地盤から10cm掘削した箇所で地山面とみられる遺構面を検出した。地山は明茶灰色シルトを主体とする。本調査区で検出した遺構は溝、土壌などであった。溝はいづれも南北方向で深さは15cm程度の浅いものである。すべて溝の底面は南から北に傾斜している。溝3から溝6までは間隔がほぼ240cmで等間隔に配置されている。溝2は調査区内で南端をもち南側の土壌1に連続している。土壌1は南北112cm、東西132cmの長円形で深さは35cmであった。

なお(01-1区)からは実測が可能な土器は出土していないが、遺物の細片には染付の磁器が多く遺構の年代は近世と推定される。

今回の調査は、遺構の全体像を理解するには調査範囲が狭いが、今回出土した溝などは農耕に伴うものとみるのが妥当であろう。なお遺構面と蓮光寺の境内のレベルとを比較すると境内が80cmから1m程度高く、調査地付近がいつの時代にか削平を受けている可能性も考えられる。

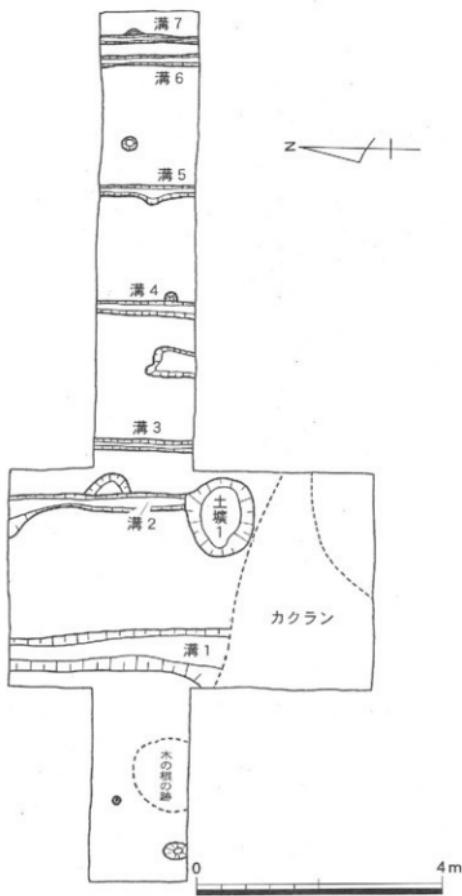


図 17 東野廃寺 01-1 区遺構平面図 (S=1/80)

#### 4. 金蔵寺跡

金蔵寺跡は大阪狭山市の西部に所在する。陶器山丘陵の一部およびその中に入り込んだ谷地形に立地している。現在遺跡の中心地には三都神社という神社が所在するが、明治初年の神仏分離、廃仏棄釈以前には金蔵寺という寺院があった。寺院の創建などについてはこれまで発掘調査などもなく不明であるが、小字名などから遺跡の範囲が推定され周知の埋蔵文化財包蔵地となっている。



図 18 金蔵寺跡調査区位置図 (S=1/5000)

##### (01-1区)

今熊5丁目624に所在する。調査地は今熊集落の南西端にあたり、背後は山林となっている。調査地から100m南西には三都神社が鎮座している。住宅の建築に伴って発掘調査を実施した。

予定されている住宅の規模にあわせて東西810cm、南北440cmの調査区を設定し、掘削をおこなったところ現状地盤より18cmさがった箇所(T.P.106.15m)において遺構面を検出した。遺構の精査に努めたところ土壌、溝など多くの遺構を検出することができた。調査区の北東隅において遺構面が深さ最大60cmにわたって東北側に傾斜している部分(落ち込み1)を検出した。この部分の少し西側には南に伸びる小道があり、その小道を少し進むと谷をせき止めた溜池がある。現在、調査地周辺は平坦であるが、このような地形を考え合わせると、元来は調査地の西側には南北方向の谷が走っておりそれを埋め立てて平坦面が作られているものと思われる。落ち込み1はこの谷に続く傾斜であろう。ここからは漆焼甕、青磁碗などが出土しており、この谷の埋め立ても近世に行われたものであろう。この落ち込み1よりも東側の遺構面はほぼ平坦であるが、周辺の地形条件を考えると、このような平坦面が自然に形成されていたとは考えがたく、斜面の削平などによって人為的に形成されたものであろう。

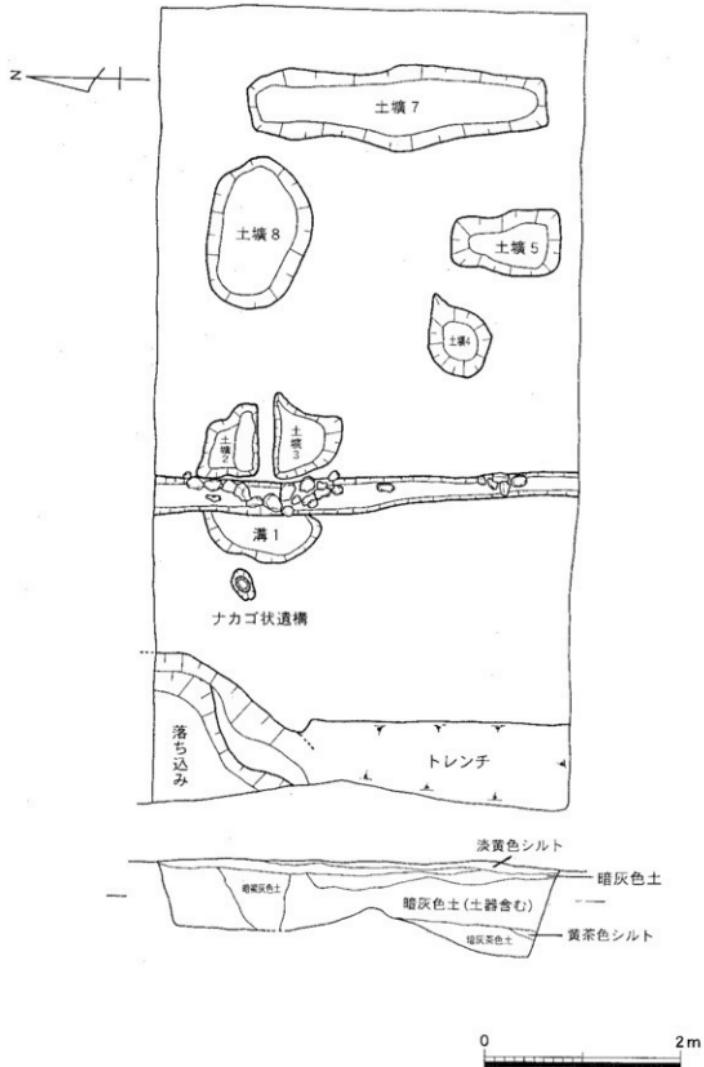


図 19 金藏寺跡 01-1 区 遺構平面断面図 (S=1/50)

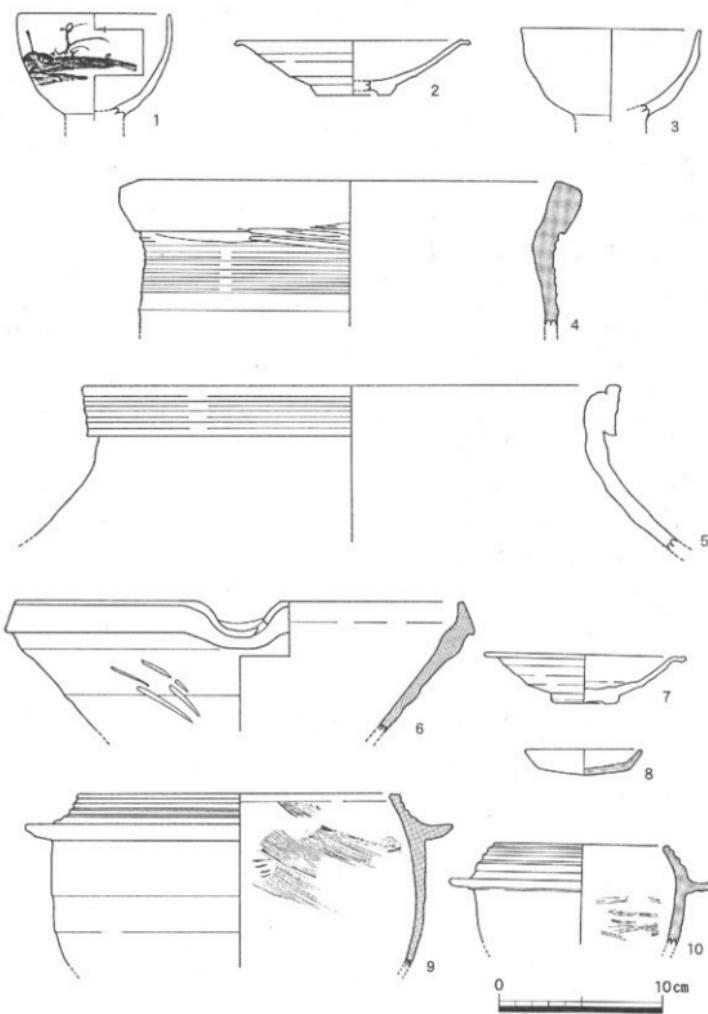


図20 金藏寺跡01-1区出土遺物(1)

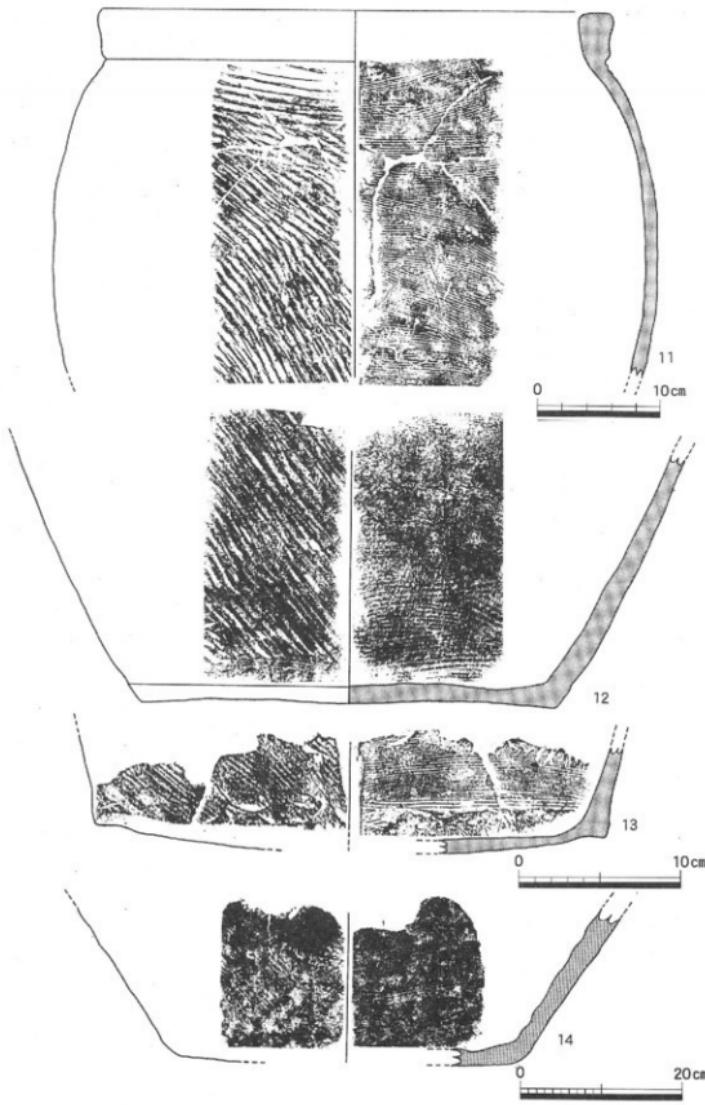


図 21 金藏寺跡 01-1 区出土遺物(2)

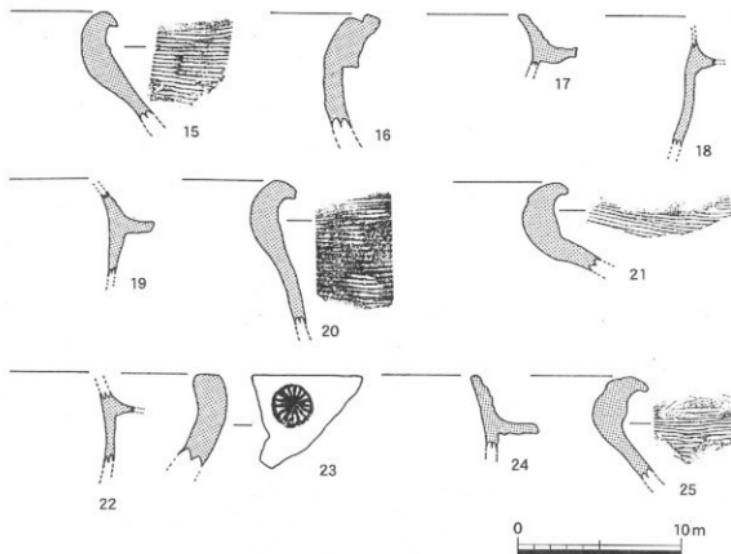


図22 金藏寺跡01-1区出土遺物(3)

図面番号	遺構面	器種	产地	口径	器高	文様	その他
1	土壤1	磁器・中輪	肥前1系	9.2cm	6.9cm	? (透明釉)	
2	土壤1	陶器・小皿	瀬戸美濃系	14.6cm	4.6cm	(透明釉)	
3	土壤1	磁器・中輪	肥前系	11cm	5.9cm	(透明釉)	
4	土壤1	土器・甕	堺	26cm	9.1cm		
5	土壤4	須恵器・甕	東播系	33cm	11.4cm		
6	土壤5	土器・鍍鉢	東播系	29.6cm	8.3cm		
7	土壤7	陶器・小皿	瀬戸美濃系	12.5cm	3.1cm	(透明釉)	
8	土壤6	土師皿		9.2cm	1.6cm		
9	土壤5	土器・羽釜	河内	20cm	10.9cm		
10	土壤6	土器・羽釜	河内	10.6cm	6.3cm		
11	土壤5	土器・瓶		40.8cm	30.2cm		
12	土壤5	土器・甕			16cm		底径25.4cm
13	土壤2	土器・甕			6.9cm		底径31cm
14	土壤5	土器・甕			20.4cm		底径42cm
15	含包層中	土器・甕			6.9cm		
16	土壤4	土器・甕			7.2cm		
17	土壤4	土器・羽釜			3.2cm		
18	土壤4	土器・羽釜			6.9cm		
19	土壤4	瓦質・羽釜			5.5cm		
20	土壤5	土器・甕			9cm		
21	土壤5	瓦質・甕			5.5cm		
22	土壤5	土器・羽釜			4.7cm		
23	土壤5	瓦質・火鉢			5.9cm		
24	土壤6	瓦質・羽釜			4.6cm		
25	土壤6	瓦質・甕			6.9cm		

調査区のほぼ中央を溝1が南北に通っている。幅は32cm、調査区内における長さは440cm、深さは20cmで底面は北側に向けて傾斜している。溝のには差し渡しが10~20cmの自然石が多く入れられていたが、これらは明瞭な配列を示してはいない。溝1より少し西側に長径30cm、短径20cmの楕円形の土壙があるが、この土壙の内部は深さ20cmまで堀りさげられているものの、底面には黄灰色砂を長径15cmの楕円形に遺構面の高さまで盛りたてた突起状の遺構がみられた。鋳物のナカゴのような形態であるが、土に赤変した様子はなく遺構の性格は不明である。溝1の東側に接して二つの土壙がみられた。土壙2は1辺が80cm、60cmの直角三角形に似た形態で深さは28cm。土壙3は径90cmの半円形で深さは18cmであった。また調査区の南側の土壙4は長径90cm、短径68cmの楕円形。深さは23cmである。この土壙からは中世の遺物が出土している。また土壙5は110cm・70cmの長方形で、深さは40cm。土師質の甕が2点重なりあった状態で内部から出土している。土壙8は長径160cm・短径110cmの楕円形。深さは50cmである。

遺構の全体としての性格は不明であるが、これらの土壙の内部からは甕などが割れた状態で出土しているので、いづれも投棄用の穴と思われる。また出土遺物は近世のものが中心であるが土壙4出土遺物のように中世遺物を含んでいるものもあり、同一平面を長期にわたって使用していたことがわかる。調査地は小字「門の内」に含まれ中世には大寺院であったといわれる金蔵寺の境内に含まれると思われるが、今回の調査で中世の遺物を検出したことはこの遺跡の性格を考える上で重要であろう。

01-1区より出土した遺物は図20~22および表5に示した通りである。

## 5. 狹山新宿遺跡

狹山新宿遺跡は今年度新規に発見された遺跡である。狹山池の堤防を通り、そのまままっすぐ南東に伸びる道は、東除にかかる橋の手前で狹山藩陣屋の大手筋と合流し、現在の大阪狭山市駅前を通過し富田林市甘山方面につながる古い道である。慶長13年(1608)片桐且元が狹山池を改修した際に、この道の両側に30軒の屋敷地を確保し、そこに池の権を管理する権役人を住ませた。それぞれの屋敷地は間口6間、奥行60間の細長い土地であり、この土地の年貢は権役人の職務を考え特別に免除されていた。この権役人が集住していたのは、東除川にかかる狹山橋からおおよそ現在の大阪狭山市駅あたりまでの間であると考えられ、狹山新宿や狹山新町と呼ばれていた。これまでこの周辺での開発は少なくこの場所は遺跡とされていなかったが、今回01-1区となった発掘に先立つ掘調査で近世の遺物、遺構が検出され、またこの遺跡が先に述べた通り歴史的にも非常に重要な価値をもつと考えられたため、あらたに周知の埋蔵文化財包蔵地に指定したものである。遺跡の名称は歴史的な経過を考慮して「狹山新宿遺跡」とすることとした。

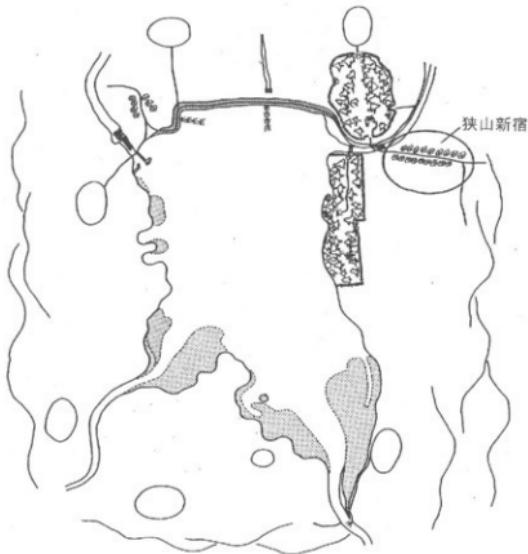


図23 狹山池惣絵図（トレース図）



図 24 狹山新宿遺跡調査地位置図 (S=1/5000)

### (01-1区)

狹山新宿のもっとも北西には浄土宗の報恩寺という寺院が建立されている。この寺院の本堂および庫裏の建て替えに伴って発掘調査を実施した。予定される建物は細長いため、調査区も2地区にわけ、東部には4m・4mの調査区を、また西部には東西1800cm・1380cmの調査区を設定して調査を実施した。また両調査区には幅60cm・長さ2500mのトレチを掘削して遺構、遺物の状態を調べた。その結果東側の調査区においては現状地盤の下に20cmの厚さで盛土が施しており、その下は水田の作土となっていた。作土の厚さは18cmでその下はすぐ地山となり、遺構面は検出できなかった。トレチにおいてもほぼ同様の結果を得たので、調査は西側の調査区に限定して進めることとした。西側の調査区はほぼこれまで報恩寺の本堂が建てられていた場所にあたっている。

発掘開始以前の調査地は調査区東端より900cmまでの部分は最大で50cm、西側の部分より高くなっていた。この面はゆるやかに西側に傾斜し、35cmの段差をへて西側の部分につながっていた。高くなった部分には最近解体されるまで報恩寺の本堂が建てられており、この部分はその基壇であると考えられる。本堂は平たい礎石の上に柱が載っていたが、これは解体の際に撤去されていた。

この現状地盤から20cm掘削した箇所で第1遺構面を検出した。この面においても東西の地表面に35cm程度の段差がある。この段はやはり寺院の基壇にともなうものであろう。ただし西側の段の上では遺構はほとんど検出できなかった。礎石を用いて建立した建物であったため礎石撤去後は顯著な遺構が残存しなかったものと思われる。この段差から東側には南北方向の溝2本とそれにはさまれた柱列などが検出された。溝1は段差のすぐ東側を走る南北方向の溝で、北側に向けて幅が広がっている。調査区内で確認できる長さは1140cmで幅は北端で570cm、南端で180cm、深さは12cmである。

この溝の東側に幅150cmほどの平坦な場所があり、そこに4基の柱穴が平均270cmの間隔で直線に並んでいた。これは明かに柵や柵などに伴う柱列と思われる。この柱列の位置はちょうど元来の報恩寺敷地の東端にあたるため、境界のための柵、柵などの遺構と考えられる。またこの柱列の東側には溝あるいは土壌と思われる掘り込みがあるが、調査区の内部ではその東側の肩を検出しているだけである。この溝2の内部には複雑に切り合った状態の土壌が3基みられる。溝の一番深い部分の深さは22cmである。

これまでの記述では段差の左右で最初に検出された遺構面を第1遺構面として記述してきた。東西の第1遺構面がほぼ同時代のものであることは間違いがないと思われる。更に掘削を続けた結果、レベルが高い西側では4枚の遺構面が検出され、第5遺構面にいたって東西の遺構面の高さはまったく等しくなり、また東西の遺構も連続性を示すようになる。この第5遺構面は調査区の東側だけに限定すれば第2遺構面ということになる。またさらにその下に第6遺構面も存在していた。このように東西の遺構面の対応関係は非常に複雑であるため、ここでは西側の遺構面の数次を基準として以下の説明を続けることとした。

第2遺構面は西側のみの遺構面である。第1遺構面を15cm掘削した場所で検出された。この面は砂と粘土を混ぜた土を地面の上に置き、堅くしめたもので、いわば土間状に加工

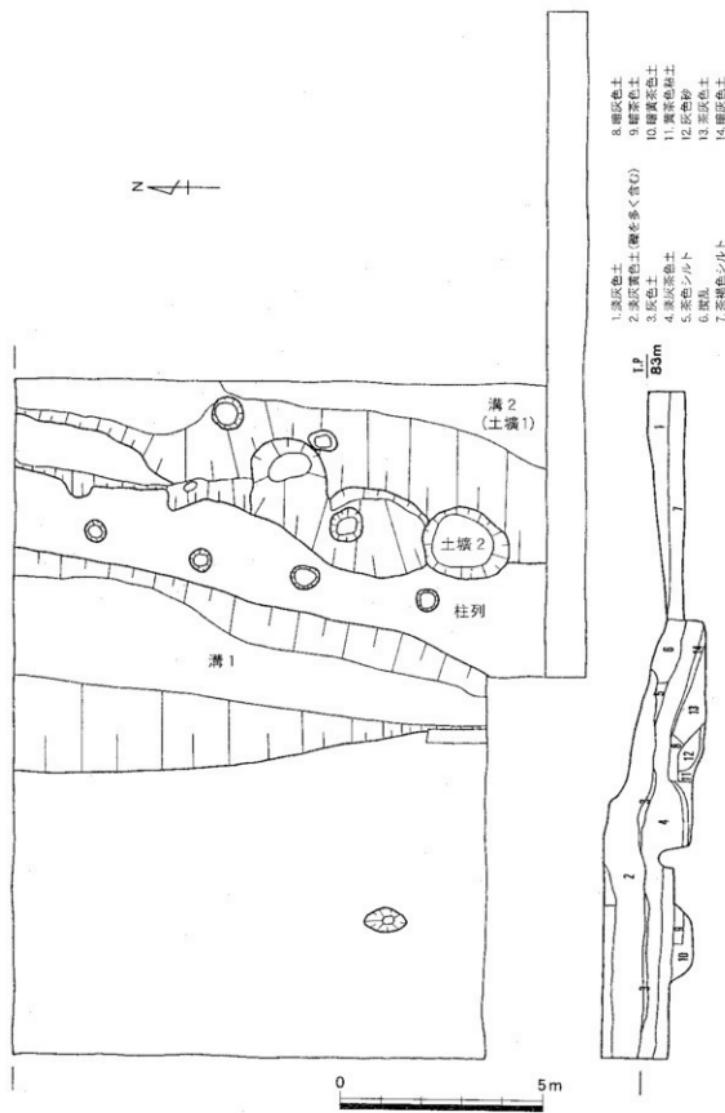
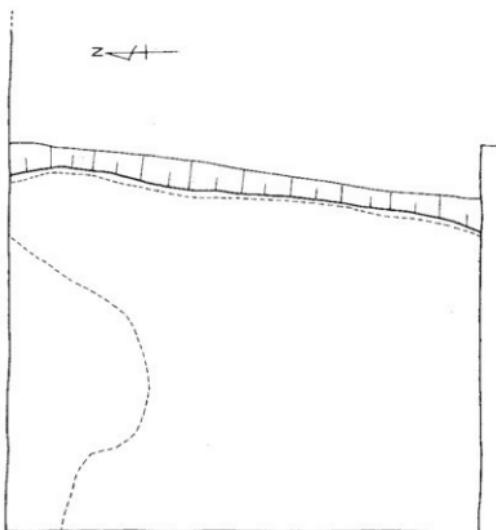


図 25 狹山新宿遺跡 01-1区第1面平面面図 (S=1/120)



(第2面・西側のみ)

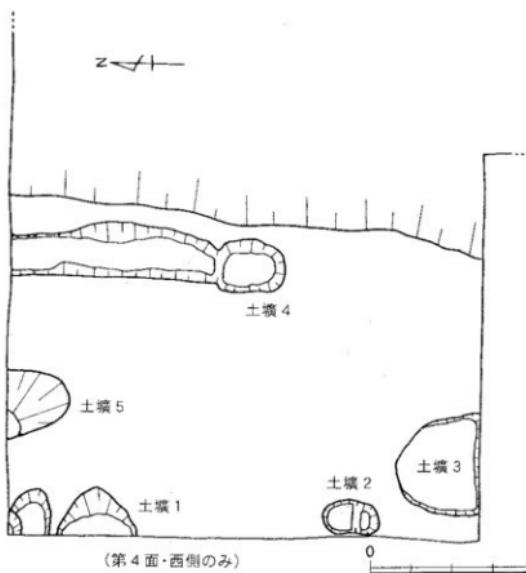


図26 狹山新宿遺跡01-1区第2・4面平面図 (S=1/120)

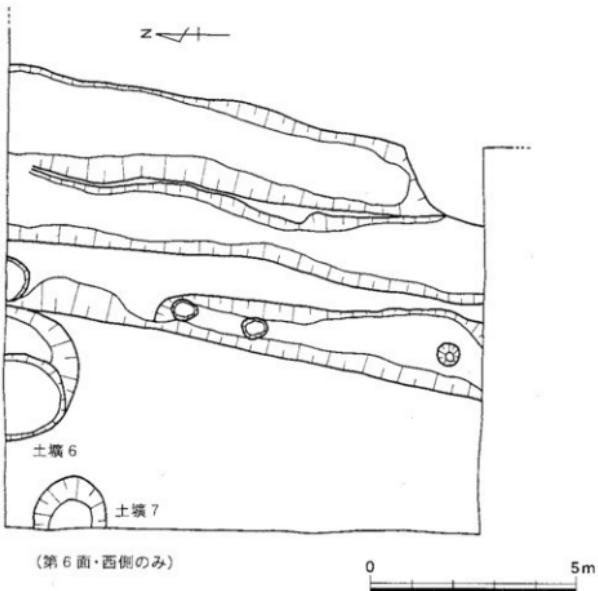
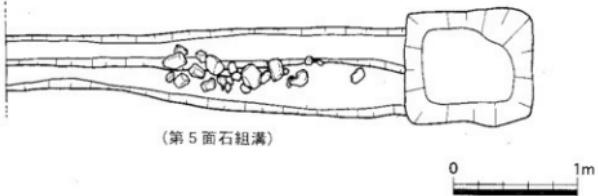


図 27 狹山新宿遺跡 01-1区 第5・6面平面図 ( $S=1/40$ ・ $S=1/120$ )

された面である。厚さは1~2cmである。調査区内では南北960cm、東西720cmの範囲でこのような面を検出することができた。この面においてはこの堅く締められた層のみが遺構といえるものであり、他の遺構はみられない。

第3遺構面も西側のみの遺構面である。第2遺構面で確認された土間状の層をはがして検出されたのが第3遺構面である。この層は第2遺構面を貼るために盛り土を施し平坦に整えられた下部構造ともいべき面であり、第2遺構面との時期差は考えられないだろう。この面においても顕著な遺構は検出できなかった。

第4遺構面も西側だけの遺構面である。第3遺構面から5~8cm程度掘削を進めたところ、淡灰茶色土を主体とする第4遺構面を検出した。第4遺構面では土壌数基や溝などを検出している。土壌3は調査区外に一部はみ出すが、その部分についても掘削を進めたところ直径160cmの正円形の土壌で、深さは65cmで底部も平坦に仕上げられていた。掘削中は井戸の可能性を考えていたが深さなどからその可能性は少なく用途は不明である。出土遺物から近世前期の遺構面と考えられる。

第4面からさらに5cm掘削を進めたところで第5遺構面を検出した。この遺構面において東西の地表の高さはほぼ等しくなった。ただこの遺構面の真ん中を南北に走る2本の溝の周辺だけは埋め立てられ、そこにさらに石組を含む溝が掘られていたので、ここでは上のものを第5遺構面とし、下のものを第6遺構面としたい。第5遺構面の石組溝は正確には2本の別個の溝が隣接したもので方向はともに南北、一番南で土壌に連続して止まっている。溝はともに深さ15cmで、土壌は南北100cm、東西90cmの長方形、深さは25cmであった。溝2本は全く平行して走っているが、その境界付近に拳大の石がかたまたたいた状態で出土し、ホウラクなど近世前期の遺物もそのなかに混ざっていた。

第5遺構面の溝部分を掘削したのち、さらに掘り進め、第6遺構面の全体的な掘削をおこなった。第6遺構面は南北方向に走る2本の溝とその西側の数基の土壌からなる。溝は西側のものが幅280cm、深さ40cmで西側斜面では途中で段をもち、その段の平面図に3基の柱穴をもつ。東側の溝は幅50cm、深さ35cmであった。また土壌6は調査区内で南北120cm、東西220cmを計り、深さは45cm。2段に堀りこまれている。土壌7は調査区内において東西88cm、南北120cm、深さ40cmである。

また本調査区より出土した遺物の詳細については図28、29及び表6に掲載した通りである。狭山新宿遺跡01-1区では、調査前の予想と反して非常に多くの遺構面を検出することができた。この調査区を特徴づけるのは調査区の西半分をしめる西側の段である。この段は寺院の基壇として作られたものであるが、第5、6遺構面の時代である近世の初期~前期にはいまだこの段は存在せず、その後3~4回にわたって少しづつ盛土を施されていったことが明かになった。報恩寺は慶長6年(1601)に金蓮社幡谷上人哲道大和尚によって開基され、享保9年(1723)に改築されている。慶長6年というのは片桐且元によって狭山池が改修され狭山新宿の町並みが作られた慶長13年(1608)より7年早い。また現在報恩寺の北側を東除川が流れているが、これが開削されたのも狭山池慶長の改修に際してであるから、やはり報恩寺創建以後ということになる。今回出土した遺構のうち第5、6

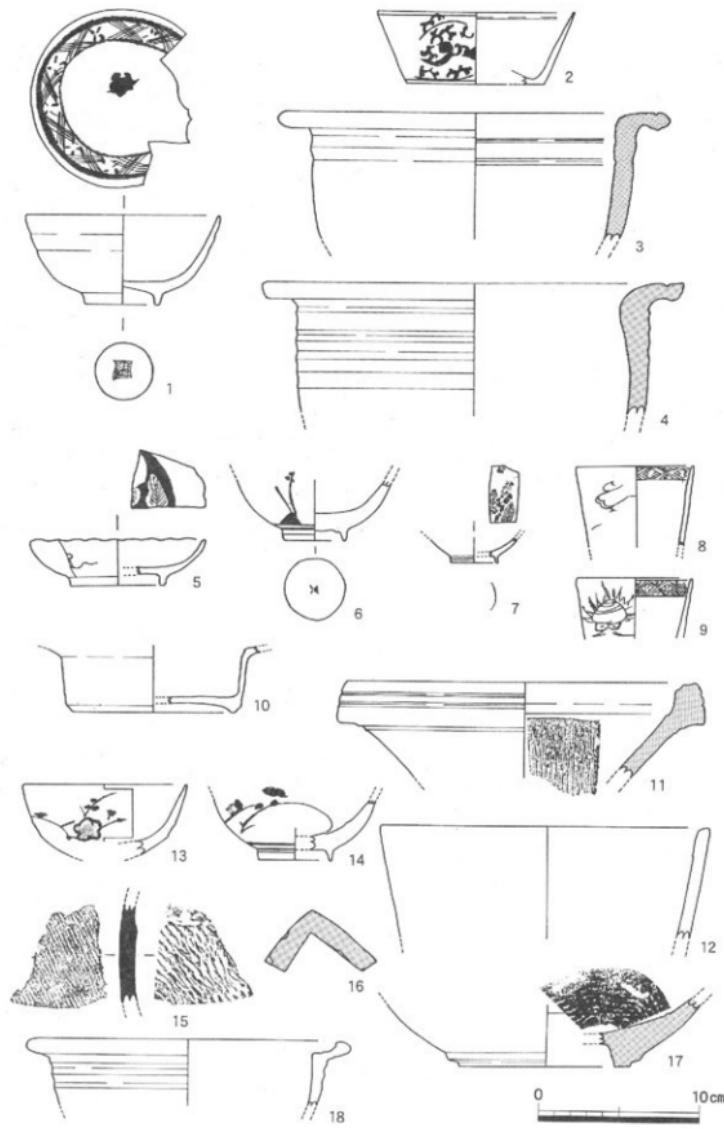


図 28 狹山新宿遺跡 01-1区出土遺物(1)

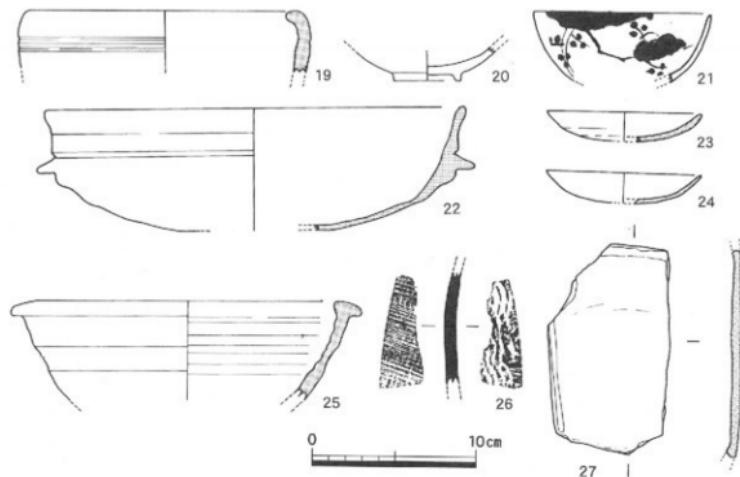


図 29 狹山新宿遺跡 01-1区出土遺物(2)

遺構面は近世初期～前期が出土しているのでおそらくは享保6年の再建以前の遺構面であろう。西側の基壇は第4面以後に作られたものであるから現在の場所に基壇が作られて本堂が建立されたのはそれ以後ということになる。それ以前には本堂は別の場所、おそらくは現在よりも南側に建てられていたか、あるいは現在の場所に建立されていたとすれば基壇を伴わない建物であったということになる。

図面番号	層序	遺構	器種	産地	口径	器高	文様	その他
1	第1面	北トレンチ中	磁器・大碗	肥前系	12	5.5	外面緑釉(染付) 裏面崩し角福 縁内四方 棒、 見込み五弁	高台径4.6
2	第1面	北トレンチ中	磁器・	肥前系	12	4.4	透明釉(染付) 唐草	高台径8.4
3	第1面	北トレンチ	土器・中腹		24	7.7		
4	第1面	北トレンチ	土器・中腹		26	8.1		
5	第1面		磁器・小皿	肥前系	11	2.9	透明釉(染付) 見込み草 口緑輪花形	高台径5.8
6	第1面	土壤1中	磁器・中碗	瀬戸美濃系		3.7	透明釉(染付)草	高台径3.8
7	第1面	土壤1中	磁器・酒杯	肥前系		1.6	透明釉(染付・ 赤絵付・金)草花	高台径3
8	第1面	土壤1中	磁器・猪口	肥前系	7.4	5	透明釉(青色染 付)縁内四方棒	
9	第1面	土壤1中	磁器・猪口	肥前系	7.2	4.4	透明釉(染付) 縁内四方棒	
10	第1面	土壤1中	磁器・不明	肥前系		4.1	薄緑色釉	高台径10
11	第1面	土壤1中	せつ器・罐	堺	22	5.9		
12	第1面	土壤1中	陶器・鉢		20	7	透明釉	
13	第4面	土壤4	磁器・中碗	肥前系	10	4.4	透明釉(染付) 草花	
14	第4面	土壤3	磁器・中碗	肥前系		3.8	透明釉(染付) 草見込み輪ハゲ	高台径4.4
15	第4面	土壤3	須恵器・甕			6.3		厚さ1
16	第4面	土壤3	瓦					長さ7.4 厚さ1.3
17	第4面	土壤3	陶器・中皿	肥前系		3.8	茶・白釉	高台径10.4
18	第4面	土壤3	土器・土鍋		19	4	赤茶釉	
19	第4面 上り下		土器・火入		18	3.8		
20	第4面	土壤4セクシ ョン	陶器・中皿	丹波		1.9	茶釉	高台径4.2
21	第5面	溝1	磁器・中碗	肥前系	11	4.3	透明釉(染付) 草花	
22	第5面	溝1	土器・焰格		26	7.7		
23	第5面	掘削中(第5 面より上)	土器・土師皿		4.7	1.8		
24	第4面	土壤3	土器・土師皿		9.4	1.9		
25	第4面	土壤3	せつ器・中	信楽	22	6.1		
26	第4面	土壤3	須恵器・甕			7		厚さ0.9
27	第4面	土壤3	土器・不明			13		厚さ0.6

表6 狹山新宿遺跡01-1区出土遺物観察表

## ま　と　め

平成14年度はいずれも小規模な調査地が中心であったが、例年と比較して多くの発掘調査を実施することができ、その成果も一定のものがあったということができるだろう。狹山藩陣屋跡では、00-8区では狹山藩土邸宅の一部を、また01-4区では藩主御殿の一部を発掘した。00-8区は藩士邸宅台所部分にあたると思われ、カマドや水壺など生活施設が出土している。

また01-4区は第1遺構面からは弁天社の建物跡、第2遺構面からは多くの土壙や焼土壙が出土し、鉄物などの工房であった可能性も考えられる。藩主御殿のなかでこのような工房が営まれていたとすればその意味が問われなければならないだろう。

茱萸木北遺跡01-1区、東野廃寺01-1区からはいずれも近世の遺物、遺構が出土している。ともに高野街道に隣接した調査区であるが、今後も調査を継続することによって街道に沿って生活する人々の暮らしを明かにできるだろう。

金蔵寺跡01-1区からも近世の遺構・遺物にまじって中世のものが出土している。この遺跡ではこれまでほとんど調査が行われて来なかったが、この調査によって金蔵寺遺跡が中世から継続して営まれている遺跡であることが明かになった。

狹山新宿遺跡は新規発見の遺跡であるが、狹山池慶長の改修の直前に建立された寺院の歴史の一端を知ることが可能となった。



図 30 狹山藩陣屋付近の小字図

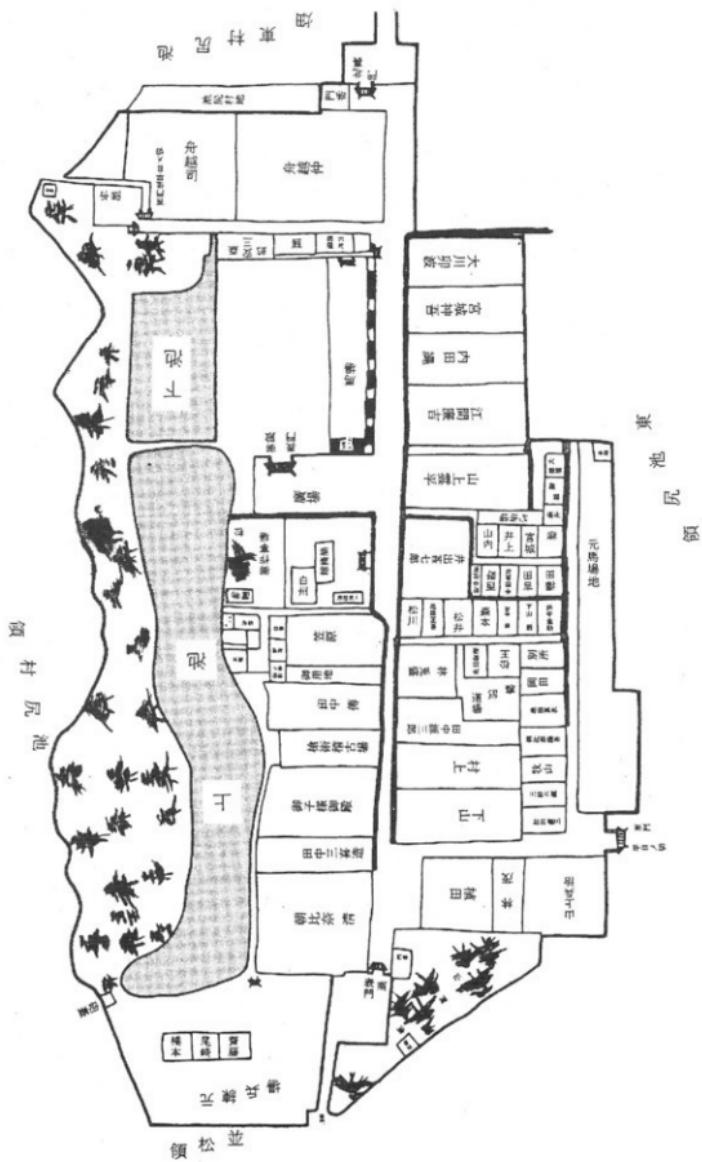


図31 狹山藩陣屋上屋敷絵図（読みおこし図）

# 報告書抄録

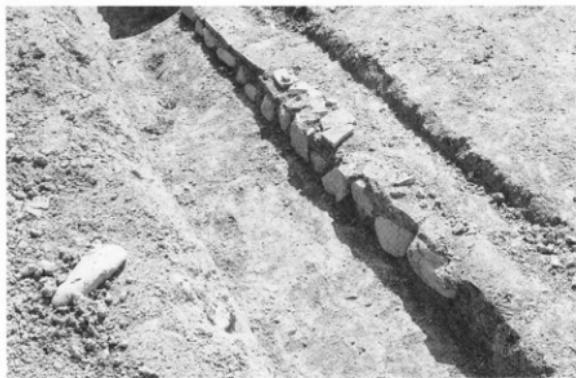
ふりがな	おおさかさやましないいせきぐんはっくつちょうさほうこくしょ12					
書名	大阪狭山市内遺跡群発掘調査報告書12					
副書名						
シリーズ名	大阪狭山市文化財報告書					
シリーズ番号	25					
編集機関	大阪狭山市教育委員会					
所在地	大阪狭山市狭山一丁目 2384-1					
発行年月日	西暦 2002年3月31日					
ふりがな 所蔵遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東經	調査区	調査面積 (m <sup>2</sup> )
さやまはんじんやあと 狭山藩陣屋跡	おおさかふおおさかさやましきやま 大阪府大阪狭山市狭山	27231	34度 30分 15秒	135度 33分 30秒	00-8 01-1 01-4	53 48 18
ぐみのききたいせき 茱萸木北遺跡	おおさかふおおさかさやましきぎ 大阪府大阪狭山市茱萸木	27231	34度 29分 00秒	135度 33分 30秒	00-1	26
ひがしのはいじ 東野庵寺	おおさかふおおさかさやましひがしのなか 大阪府大阪狭山市東野中	27231	34度 31分 00秒	135度 33分 30秒	00-1	26
きんぞうじあと 金藏寺跡	おおさかふおおさかさやましまくま 大阪府大阪狭山市今熊	27231	34度 29分 15秒	135度 32分 15秒	00-1	26
さやまんじゅくいせき 狭山新宿遺跡	おおさかふおおさかさやましきやま 大阪府大阪狭山市狭山	27231	34度 30分 15秒	135度 33分 30秒	00-1	26
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		
狭山藩陣屋跡	城館跡	江戸時代	00-8区 遺跡、石列、土壙 01-1区 城館濠 01-4区 神社跡、土壤、焼土壙	00-8区 磁器桶、鳩笛、唐津桶、現 01-1区		
茱萸木北遺跡	集落	江戸時代	01-1区 溝、井戸	01-1区 磁器桶		
東野庵寺	集落	江戸時代	01-1区 溝	01-1区		
金藏寺跡	寺院	中世、江戸時代	01-1区 溝、土壤	01-1区 土師器羽釜、磁器桶、須恵器甕		
狭山新宿遺跡	集落	江戸時代	01-1区 寺院基壇、溝、土壤	01-1区 磁器桶、拂り鉢、土師皿		

# 写 真 図 版





a. 埋甕遺構 b



b. 溝1



c. 埋甕遺構 2

a. 石列 2



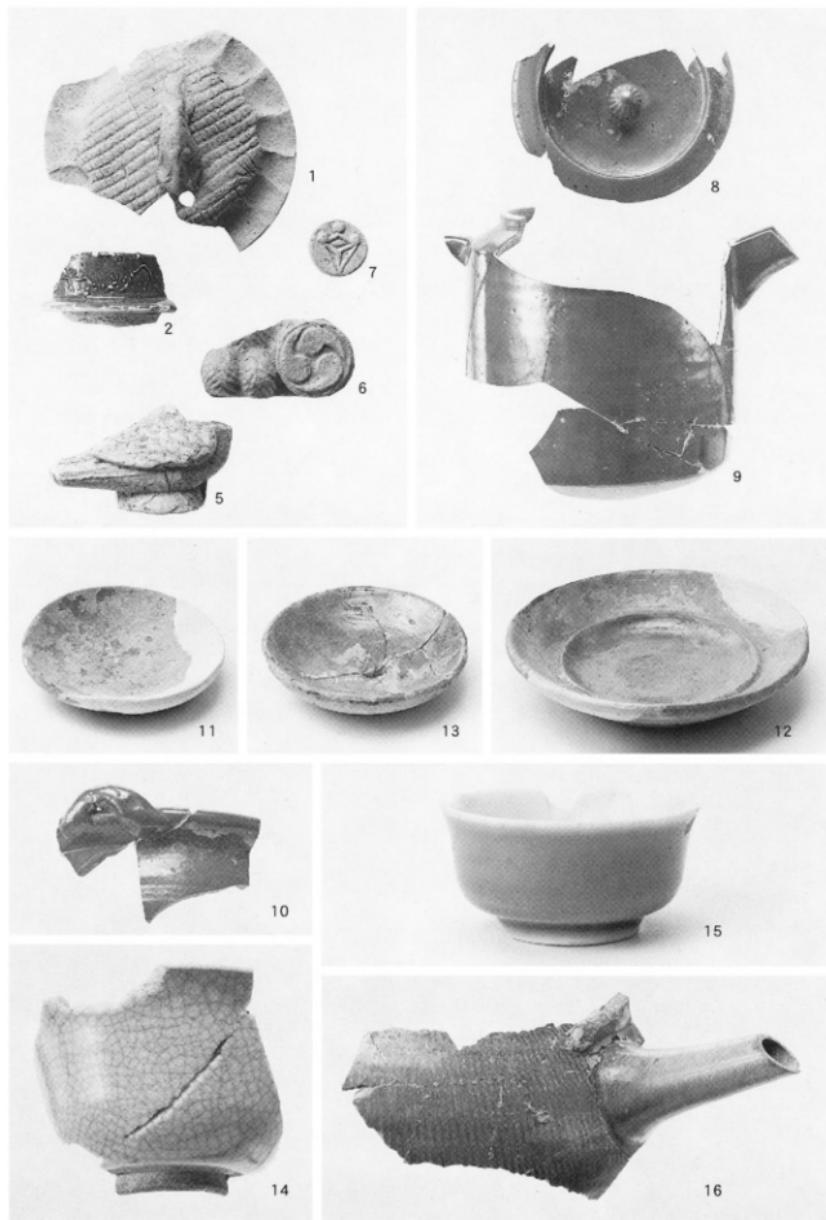
b. 土壙 1

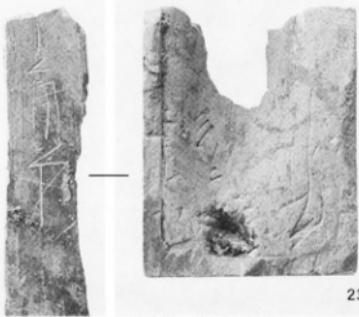
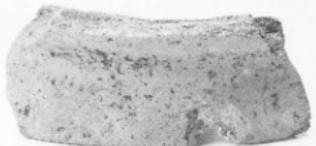
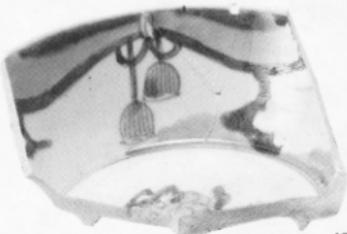


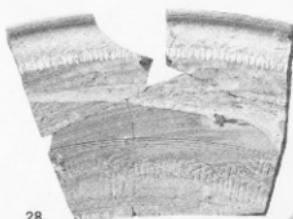
c. 土壙 1  
断面



図版4  
狭山蕃陸屋跡00-8区出土遺物(1)







28



27



29



31



30

a. 全景



b. トレンチ内部



c. 落ち込み

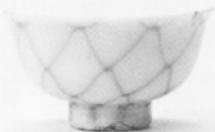




1



4



3



2



5

a. 全景  
(南から)



b. 全景  
(南東から)

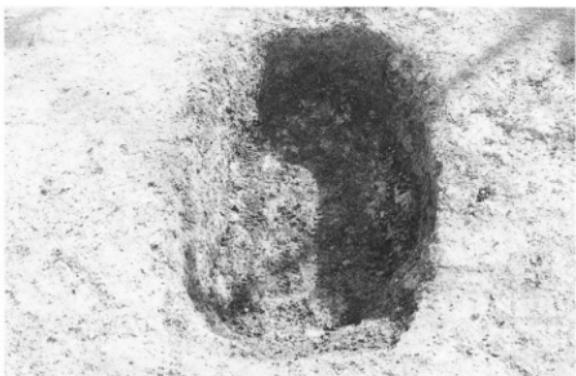


c. 全景  
(北東から)

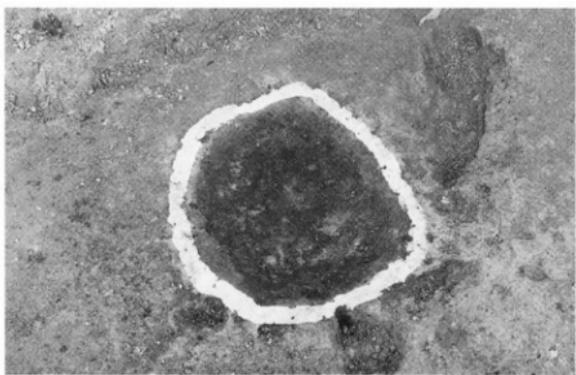




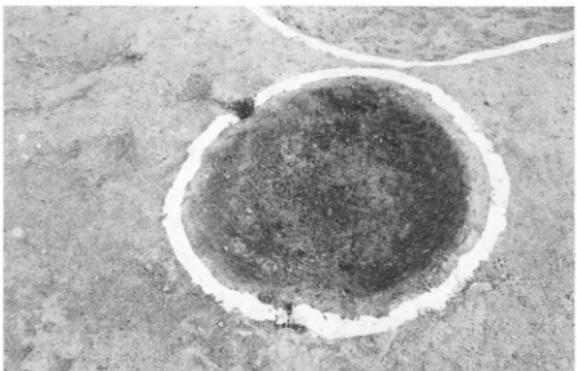
a. 焼土壙 2



b. 焼土壙 1



c. 焼土壙 3



a. 焼土塗 3  
(完振状態)



b. 焼土塗群



c. 石列



a. 土壙 6



b. 土壙 6  
断面



c. 土壙 6・溝 3  
断面

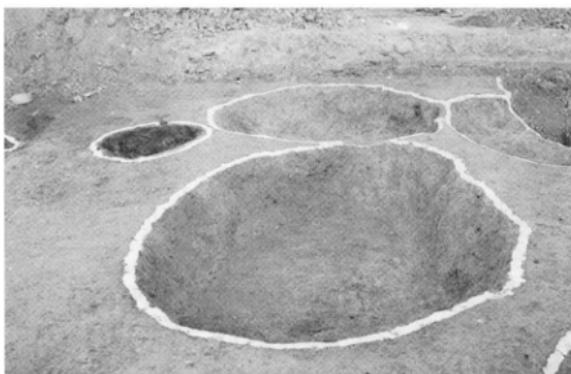
a. 土壙 6

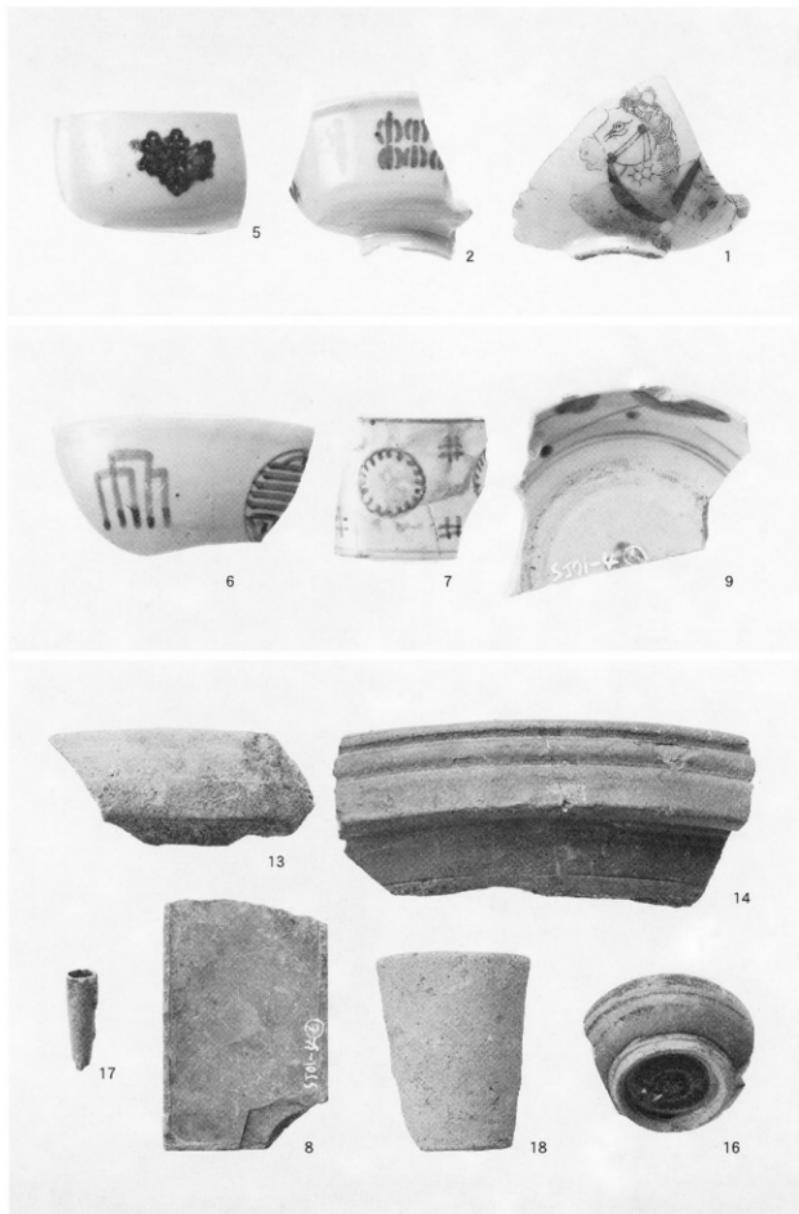


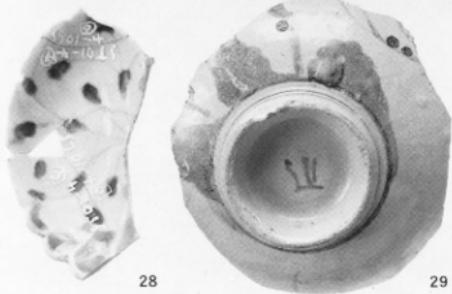
b. 土壙 5



c. 土壙 10







26



24



27



32



31



30



a. 溝 1~3



b. 溝 3の水口



c. 井戸 1



a. 全景（東から）



b. 溝列（南から）



c. 西側の溝列



a. 全景



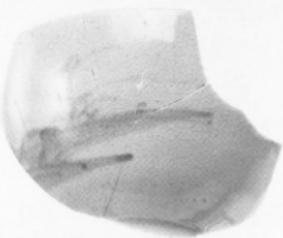
b. 墓出土状况



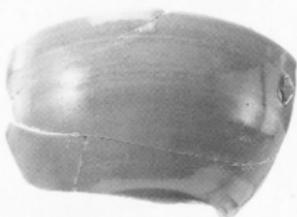
c. 土块 5



2



1



3



4



6



5



7



9



8



10



11



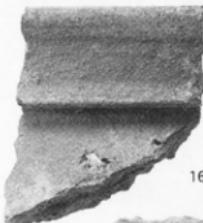
12



13



14



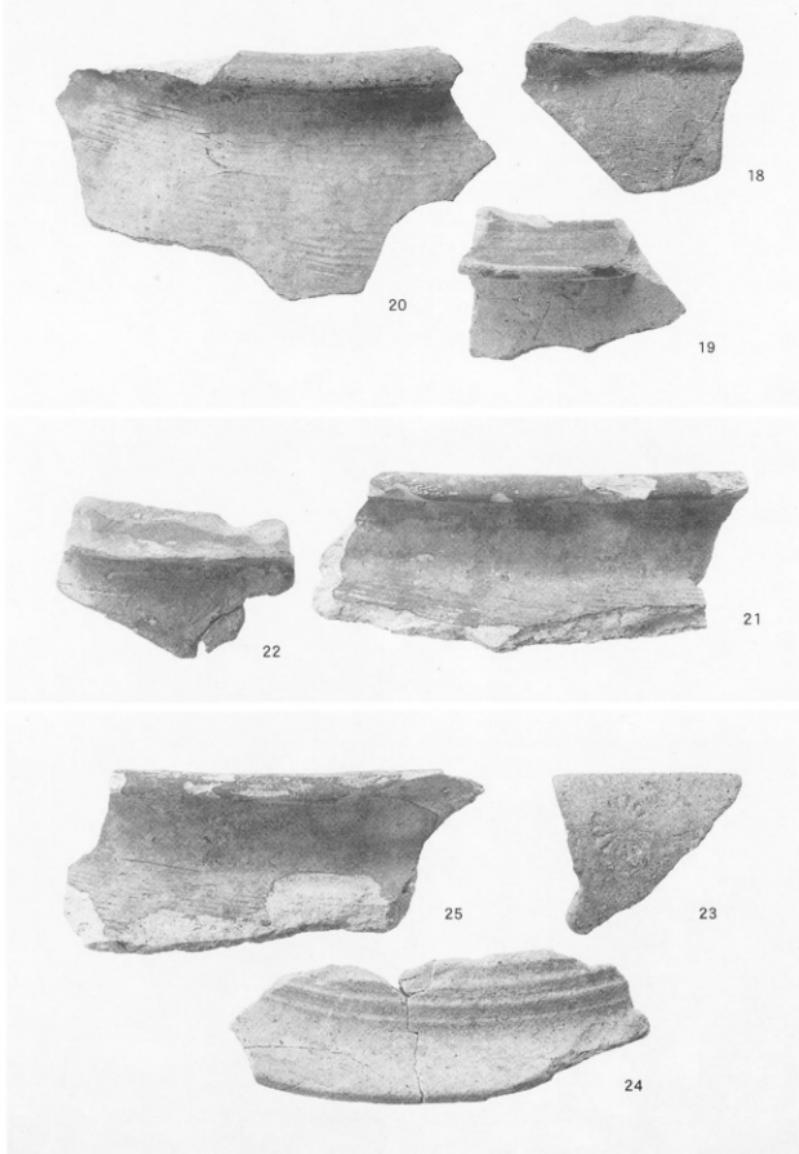
16



15



17



a. 東側調査区  
全景



b. 東側調査区  
断面



c. 東西トレンチ





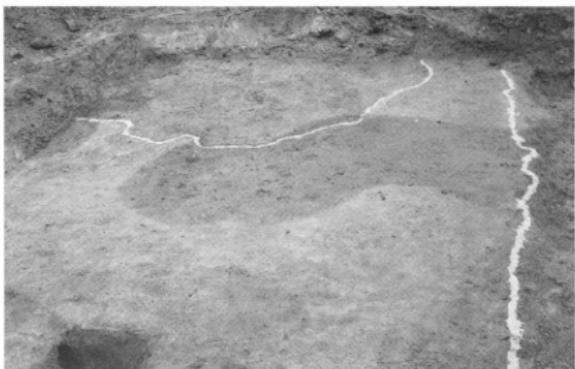
a. 第1面  
段差

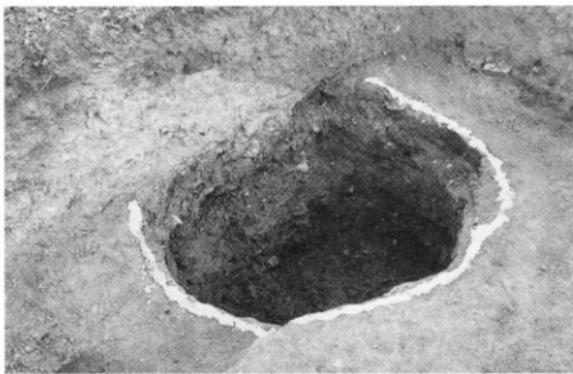


b. 第1面  
基壇上面



c. 第1面  
柱列







a. 石組溝

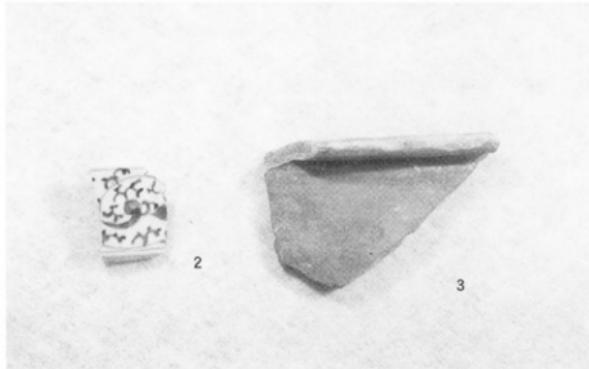
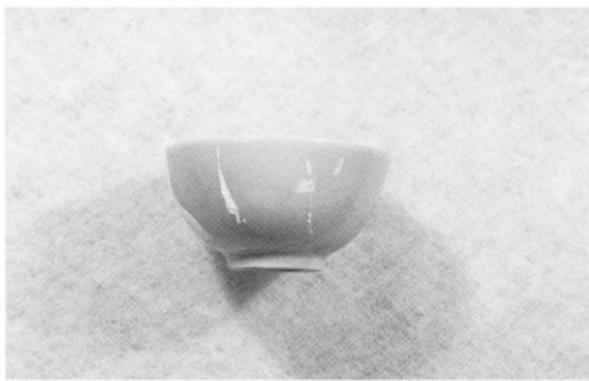
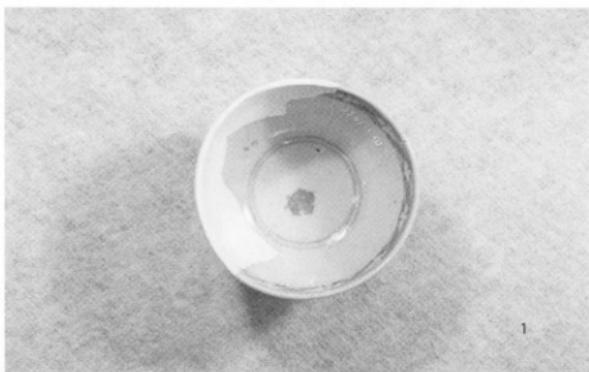


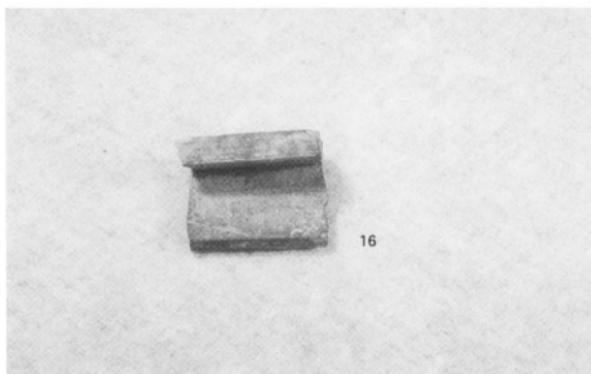
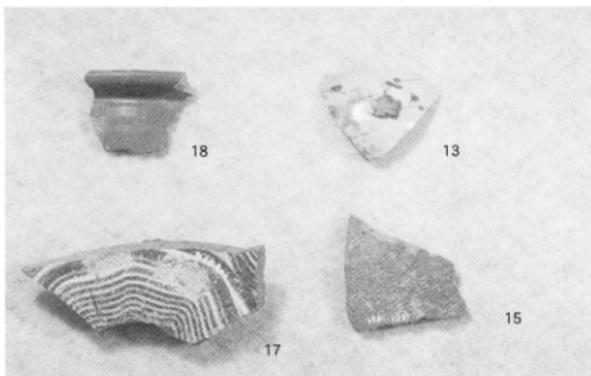
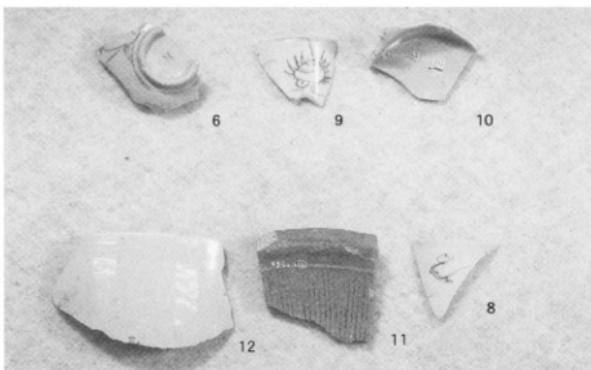
b. 石組溝  
(北から)

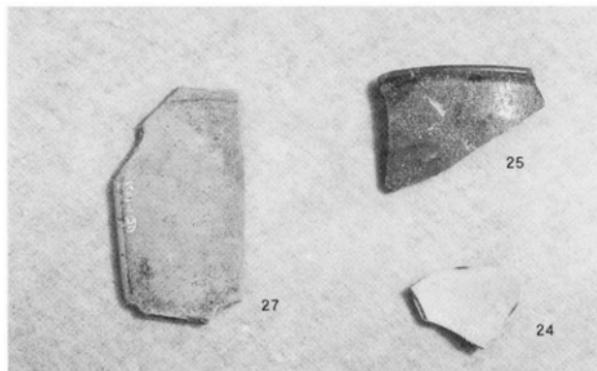
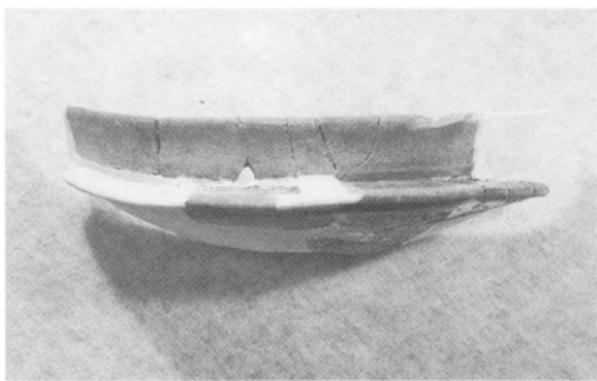
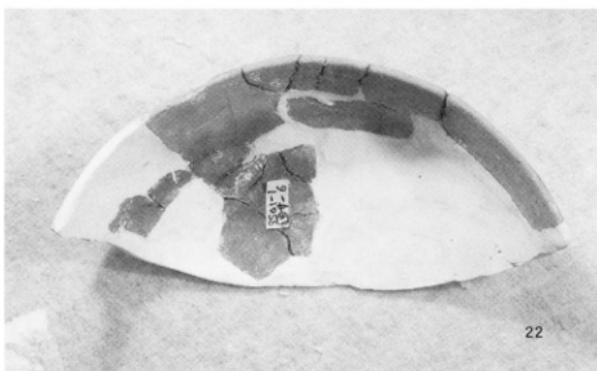


c. 土器出土状況









大阪狭山市文化財報告書25

**大阪狭山市内遺跡群  
発掘調査報告書12**

発行日 平成14年3月31日

発 行 大阪狭山市教育委員会

印 刷 ヒロシマ企画

